

『道徳感情論』の現代経済学的再解釈 アマルティア・センによる解釈への批判と、進化経済学を用いた再解釈

著者	菅 隆彦
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第18403号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00125699

『道徳感情論』の現代経済学的再解釈
——アマルティア・センによる解釈への批判と，進化経済学
を用いた再解釈——

菅 隆彦 (KAN Takahiko)

東北大学大学院経済学研究科博士課程後期 3 年の課程

『道徳感情論』の現代経済学的再解釈

——アマルティア・センによる解釈への批判と、進化経済学を用いた再解釈——

菅 隆彦 (KAN Takahiko)

序章	1
第1章 アマルティア・センの『道徳感情論』解釈の再検討 ——コミットメントと良俗の一般的諸規則——	3
1 はじめに	3
2 主流派経済学に対するセンの批判	4
2.1 主流派経済学の間観	4
2.2 センの主流派経済学批判とコミットメント	5
2.3 センのコミットメント論に対する批判	7
2.3.1 コミットメントの存在に対する批判	8
2.3.2 コミットメントを「かのような選好」で表すことへの批判	9
3 良俗の一般的諸規則	10
3.1 中立的な観察者	10
3.2 良俗の一般的諸規則の機能と形成	12
3.3 最高存在の諸法としての良俗の一般的諸規則	14
4 コミットメントと良俗の一般的諸規則	16
4.1 形成過程に基づく理由	16
4.2 最高存在の諸法であることに基づく理由	17
4.3 小括	17
5 おわりに	17
第2章 補論：アマルティア・センの政治哲学における中立的な観察者解釈	19
1 はじめに	19
2 センの「開いた中立性」と「閉じた中立性」	20
2.1 「開いた中立性」と「閉じた中立性」	20
2.2 手続き的偏狭	21
2.3 排他的無視	22
2.4 センの解釈の補足	23
3 排他的無視と正義の徳	24
3.1 正義の徳	24
3.2 正義の徳と排他的無視	25
4 手続き的偏狭について	26
4.1 Golemboski(2018)によるセン批判	26

4.2 中立的な観察者の形成過程	28
4.2.1 中立的観察者の形成過程と一般的諸規則の形成過程	28
4.2.2 中立的観察者の形成過程と手続き的偏狭	29
4.3 慈恵	30
4.3.1 個人に対して向けられる慈恵	30
4.3.2 社会に対して向けられる慈恵	31
4.3.3 普遍的仁愛	32
4.3.4 手続き的偏狭と慈恵・普遍的仁愛	33
5 道德感情の腐敗と中立的な観察者	34
6 おわりに	36
第3章 『道德感情論』における良俗の一般的諸規則形成の進化経済学的再解釈	37
1 はじめに	37
2 良俗の一般的諸規則	38
2.1 中立的な観察者	38
2.2 良俗の一般的諸規則	38
2.3 良俗の一般的諸規則と理神論	39
3 良俗の一般的諸規則形成の定式化	42
3.1 モデル	42
3.2 ダイナミクスの分析	46
4 考察	51
5 おわりに	53
第4章 『道德感情論』における道德感情の腐敗論の進化経済学的再解釈	54
1 はじめに	54
2 道德感情の腐敗	54
3 定式化	55
3.1 徳戦略と財戦略の区別, 及び3種類のプレイヤー	55
3.2 各タイプ間の対戦	56
4 考察	58
4.1 場合1	58
4.2 場合4	58
4.3 場合5	58
4.4 場合7	58
4.5 財産の道と道德感情の腐敗	59
5 おわりに	60
終章	65
参考文献	67

序章

本稿の目的は、経済倫理学と進化経済学の2つの観点から、アダム・スミス著『道徳感情論』を再解釈し、複数の学術分野において新たな知見を得ることである。

『道徳感情論』研究、あるいはスミス研究には、無論のこと大量の知の蓄積がある。それぞれの時代の文脈に応じて、様々な観点から、同書は解釈されてきた。その中の1つの潮流として、主に1990年代以降における、経済学の枠をときに超えた他分野の観点からの、同書の再解釈がある（田中 2017：12）。各分野の研究者が、同書から知見を得て各分野の現代的問題の解決に生かそうと、試みてきた。また、他分野の観点からの再解釈によって、スミス研究自体も知見を得てきた。他分野の観点からの再解釈という潮流は、現在まで続いている。例えば、同書が行動経済学の研究成果を予見していることを示すもの（Ashraf *et al.* 2005）、同書を制度派経済学の観点から再解釈するもの（Tajima 2007）、行動経済学的なモデルとの差異を明らかにしつつ、効用関数を用いて同書における主体の行動を定式化するもの（Bréban 2012）、脳科学の観点から再解釈するもの（Kiesling 2012）、経験的な道徳的判断手法の観点から再解釈するもの（Konow 2012）、合理的選択理論の観点から再解釈するもの（Khalil 2017）、が存在する。

これらの中で本稿が着目するのが、アマルティア・センの『道徳感情論』解釈である。センは、主流派経済学が想定する狭隘な人間観を「合理的な愚か者」と呼び、その現実妥当性を痛烈に批判してきた。経済倫理学におけるセンの影響力は大きく、現在まで、彼が提唱した諸概念についての議論が続いている。センは、『道徳感情論』の現代的意義を高く評価してきた。その理由の1つが、同書中の「良俗の一般的諸規則」（以下、一般的諸規則）と、ある種の「コミットメント」との強い関連性である。しかし、本稿で示すように、両概念は基本的に整合しない。このことは、このコミットメントの存在の有無についての、現在進行形の論争に影響する。センが両概念を誤って関連付けたことは、このコミットメントが存在しないことを、含意しかねない。経済倫理学における現在進行形の論争に寄与することが、本再解釈の利点である。

また、センは、『道徳感情論』における「中立的な観察者」に着目し、ジョン・ロールズの「無知のヴェール」に対して優位性を持つとした。センによれば、無知のヴェールは、中立的な決定を行うための概念であるのに、実際には中立的な決定を行うことができない。無知のヴェールは、決定の主体となる集団に内在する偏向を、克服できない。一方で、中立的な観察者はこの問題を克服できると、センは主張した。本稿は、補論として、センの中立的な観察者解釈について論じる。センの主張が新たな観点から裏付けられることを示す。また、中立的な観察者概念の政治哲学における有効性について論じる。これらの議論により、センの『道徳感情論』解釈をより深く理解することができよう。また、中立的な

観察者の判断は一般的諸規則と整合するから、この議論は、一般的諸規則についての議論ともみなしうる。この意味で、本議論は、一般的諸規則についての他の議論を補足する。

加えて、本稿は新たに『道德感情論』を進化経済学的に再解釈する。本稿が着目するのは、一般的諸規則の形成過程である。この形成過程は、主体達による継続的な他者の観察によって進行し、試行錯誤的学習によって進行するとみなされる。主体の試行錯誤学習の過程は、進化ゲームモデルによって定式化されてきた。その中から、本稿はレプリケータダイナミクスを採用し、一般的諸規則の形成過程を定式化する。本定式化には、主に2つの利点がある。1つ目は、「道德感情の腐敗」に代表される、非理神論的状况についての議論に寄与することである。道德感情の腐敗は、同書の社会秩序形成論に矛盾すると考えられてきた。しかし、本定式化によって生じる解釈からすれば、両者は矛盾しないとも考えられる。2つ目の利点は、センの経済倫理学に対しての寄与である。本章のモデルは、コミットメントの発生を説明するモデルの、1つとして位置づけられる。

さらに、本稿は、この一般的諸規則の形成のモデルを応用して、道德感情の腐敗を再解釈する。基本のモデルにおいても、道德感情の腐敗は再解釈可能であるが、応用モデルにおいては別の形での再解釈が行われる。応用モデルにおいては各戦略について、基本モデルには無い解釈が付加される。このモデルには、以下に述べる利点がある。定式化の結果として、同感という概念が道德感情の腐敗の危険を孕むとする、先行研究の解釈が正しいことが、裏付けられる。

本稿は、以下のように構成される。第1章において、良俗の一般的諸規則とコミットメントについての、センの解釈を批判的に再検討する。第2章において、中立的な観察者についてのセンの解釈を補足した後に、政治哲学における同概念の有効性について論じる。第3章において、良俗の一般的諸規則の形成過程を進化ゲームモデルによって再解釈する。第4章において、前章のモデルを応用し、道德感情の腐敗を再解釈する。終章において、本稿を総括する。

第1章 アマルティア・センの『道徳感情論』解釈の再検討 ——コミットメントと良俗の一般的諸規則——

1 はじめに

アマルティア・センはアダム・スミス¹著『道徳感情論』²の現代的意義を高く評価してきた³。主流派経済学の間観を批判する際に、センは、同書における慣習的なルールである、良俗の一般的諸規則（以下、一般的諸規則）を取り上げる（Sen 1985）。センによれば、主体の行動が自身の目標追及によって直接導かれるとする、主流派経済学の間観は、非現実的である。この間観を、センは自己目標選択と呼ぶ。加えて、センによれば、ある人が唯一目標とするものは、その人自身の厚生であるとする、主流派経済学の間観もまた非現実的である。主体は自身の厚生の改善とは異なる動機から行動するのであり、このような行動はコミットメントと呼ばれる。コミットメントには、自己目標選択を侵害するものと、侵害しないものの2種類がある。前者の、自己目標選択を侵害するコミットメントは、主体が持つアイデンティティの感覚によって生じる。ある種のアイデンティティの感覚は、アイデンティティを共有する構成員に一定の行動ルールを受容させるが、このようなルールは、『道徳感情論』における一般的諸規則と「密接に関連する」（Sen 1985 : 352）。

しかし、自己目標選択を侵害するコミットメントに一般的諸規則に関連付けることは、不適切である。一般的諸規則に従って行動することは、必ずしも自己目標選択を侵害しない。第1に、一般的諸規則は、その形成過程からすれば、主体達の目標追求と基本的に整合するとみなされる。第2に、一般的諸規則は最高存在の諸法であるとみなされるが、この認識は、自己目標選択を侵害せず、むしろ合理化する。

本章は、一般的諸規則が自己目標選択に基本的に整合することを論証する。なお、本章は、一般的諸規則に従った行動が、主流派経済学の想定する狭隘な間観に基づく行動であると、主張するわけではない。一般的諸規則は社会的に共有される規則であって、狭隘な間観に基づく行動とは矛盾する。本章が主張するのは、一般的諸規則に従うことは、

¹ 近年のスミス研究を概観する文献として Paganelli(2015)がある。Paganelli はスミス及びスコットランド啓蒙についての、文献を様々な分野に渡って俯瞰する。

² 『道徳感情論』を引用する際には、「(TMS : 「グラスゴウ版のパラグラフ番号」)」の形式で、対応する箇所を示す。

³ セン(2002), Sen(2002), Sen(2010)を参照。著名な経済学者であるセンの高評価によって、同書の意義は再認識され、これによりスミス回帰が勢いづいたとも言われている（中谷 2013 : 25）。『道徳感情論』以外も含めた、センのスミス評価については、坂本(2004)を参照。また、センの経済学と倫理学における研究全体については、鈴木・後藤(2001)が平易な解説を行っている。

第1章

基本的に主体自身の目標追及によって導かれる、ということである。主体は、社会的な規則と整合的な、自己の目標を持ちうる。

本章における議論は、自己目標選択を侵害するコミットメントについての論争に、寄与する。自己目標選択を侵害するコミットメントの存在の有無が、先行研究において論争の対象となっている。この種のコミットメントに一般的諸規則が密接に関連すると、センが述べたことは、この種のコミットメントが存在しないことを意味しかねない。一般的諸規則は自己目標選択と整合的であるから、これと密接に関連するコミットメントは、自己目標選択と整合的であると考えられる。

本章は以下のように構成される。第2節において、センの主流派経済学批判の1つである、コミットメント論及び、それに対する批判について説明する。第3節は、『道德感情論』における一般的諸規則について、中立的な観察者との関係、諸規則の形成過程、最高存在の諸法とみなされることに言及しつつ説明する。第4節において、一般的諸規則が、自己目標選択を侵害するコミットメントと、基本的に整合しないことを論証する。最終節において、議論を総括し本章の含意を示す。

2 主流派経済学に対するセンの批判

2.1 主流派経済学の間観

センの研究分野は広範囲にわたり、彼は経済学に多大に貢献してきた⁴。その中でも代表的と言えるのが、主流派経済学が想定する人間観の再検討である。センは、主流派経済学の想定する人間は、以下の3つの性質を持つとした (Sen 1985 : 347)。

自己中心的厚生 (self-centered welfare) : ある人の厚生はその人自身の消費のみに依拠する (とくに、それは他者に対するどんな共感や反感も含まない)。

自己厚生目標 (self-welfare goal) : ある人が唯一目標とするものは、その人自身の厚生または—不確実性を所与として—その厚生期待値を最大化することである (とくに、それは他者の厚生に直接重要性を付与しない)。

自己目標選択 (self-goal choice) : ある人の各選択行為はその人自身の目標追及によって直接導かれる (とくに、それは他の人々の目標追及を承認することによって制約されることはない)。

⁴ 経済学に対する、センの貢献の全体像については、鈴木・後藤(2001)を参照。

上記の3つの性質はそれぞれ独立している。例えば、他者の窮状に影響されて、自身の厚生が低下している人間を考える。この人間は、他者の窮状を我が身のように感じ、心を痛めているとする。この場合には、自己中心的厚生が侵害されるが、これは他の2つについては何も意味しない。主体が何を目標とするかについては、何の情報も与えられていない。

主流派経済学が想定する人間は、上記の3つの性質を満たした上で、利害関心・厚生・目標・選択が、単一の選好順序に要約して表現される。このような人間を、センは、「合理的な愚か者」(rational fool)と呼び批判した(Sen 1977 : 336)。合理的な愚か者の人間観は、現実の人間像と整合しないばかりか、経済学が研究対象とする、選択行動を適切に表現できない場合がある。公共財についての研究や、戦略的投票についての研究においては、合理的な愚か者の人間観を採用することで問題が生じうる(Sen 1977 : 330ff.)。

2.2 センの主流派経済学批判とコミットメント

センは、合理的な愚か者に替えて、人々の相互依存的な関係を自己の評価システムに包含するような、人間に着目する(鈴木・後藤 2001 : 174)。そのような人間に関係するのが、「共感」(sympathy)と「コミットメント」(commitment)という2つの概念である。共感とは、「他者への関心が直接に己の厚生に影響を及ぼす」ことである(Sen 1977 : 326)。共感が成立することは、前述の自己中心的厚生の侵害を意味する。

コミットメントとは、「個人の厚生と行為の選択とのあいだの密接な結びつきを壊すこと」である(Sen 1985 : 347)。例えば、ある行為によって他人が苦しむことを知り、それが自分の厚生を悪化させないにも関わらず、その行為をやめることは、コミットメントの1つである(Sen 1977 : 326)。コミットメントは、主体自身が持つモラルと密接に関係する。このモラルは、宗教的なものから政治的なものに到るまで様々であり、また歪んだものから十分に議論されたものまで、非常に広い意味を持ちうる。そして、コミットメントの基礎にあるモラルは、おそらく「ある制限されたものであって、功利主義のようなアプローチの持つ壮大さとは程遠い性質のものである」(Sen 1977 : 335)。

コミットメントには、自己目標選択を侵害しないものと、侵害するものの、2種類がある。コミットメントは、選択の自己厚生からの乖離を意味するが、この乖離は、主体の自己目標の追求の過程で生じたのかもしれない。あるいは、この乖離は、自分自身の目標追及を制約した事に起因するかもしれない(Sen 1985 : 348)。

センは、自己目標選択を侵害するコミットメントを生じさせる要因として、アイデンティティを挙げる。各人は多くのアイデンティティを同時に持っているのであり、「単に私で

ある」ことが、自分自身を理解する唯一のやり方ではない (Sen 1985 : 348)。共同体、国民性、階級、人種といった要素が、様々なアイデンティティを各人にもたらす。これらのアイデンティティは、各人の厚生や目標、または行動義務を見る方法に影響を及ぼす。アイデンティティの感覚は、アイデンティティを共有する他者の目標への配慮を、主体に促し、自身の私的な目標の追求を止めさせることも十分にありうる。アイデンティティを共有するという一体感が、主体の判断に影響を与えるのである。他者とのアイデンティティの共有は、そのアイデンティティに基づいた一定の行動ルールを生み出し、それを各主体に受け入れさせうる。

センは、このようなルールの存在について述べた後に、アダム・スミスが『道徳感情論』において、行動ルールの重要性を強調していたことを指摘する (Sen 1985 : 349)。後の節で述べる、良俗の一般的諸規則がこの行動ルールに該当する。センの同書についての指摘は手短なものであったが、結語においても、スミスの行動ルールは言及された。結語においては、アイデンティティの感覚によって生じる自己目標選択からの離反は、スミスが論じたルールに基づく振る舞いに密接な繋がりを持つとされた (Sen 1985 : 352)。センにとっては、コミットメントとスミスの行動ルールの関連の強さは、特筆すべきものであるようだ。

自己目標選択を侵害するコミットメントを、センは特に重要視する。センは、囚人のジレンマの解決を論じる際に、自己中心的厚生・自己厚生目標を否定することは意味を持たないとした。これらの性質を否定したとしても、ジレンマが生じるような選好の組み合わせを回避することはできない。しかし、自己目標選択を否定することは、ジレンマの問題を解決しうる。

囚人のジレンマにおいては、支配戦略によって生じる結果がパレート非最適となる。2人のプレイヤーA, B が存在し、 a_0 をAの協力戦略とし、 a_1 をAの裏切り戦略とする。Bについても同様に、協力戦略が b_0 、裏切り戦略が b_1 とする。2人のプレイヤーがジレンマ型の選好を持つとき、生じる結果は a_1b_1 であるが、これは a_0b_0 にパレート支配されている。

囚人のジレンマ型の選好 (左の結果がより好まれる)

プレイヤーA : a_1b_0 a_0b_0 a_1b_1 a_0b_1

プレイヤーB : a_0b_1 a_0b_0 a_1b_1 a_1b_0

センによれば、このジレンマの状況は、自己目標選択を侵害するコミットメントによって、解決されうる⁵ (Sen1985 : 349ff.)。このような解決法は、複数種類の選好が同時に存在することを仮定することで、表現される。主体は、自分自身の目標を反映する本来の選

⁵ 本段落で述べる、センのジレンマの解決法に対する批判として、Baier(1977)が存在する。

好を持つのに加えて、同時に、目標追求の基準となる「かのような選好」(as if preference)を持ち、これにコミットメントが反映される。プレイヤーが「かのような選好」に従って戦略を選ぶことで、 a_0b_0 は実現しうる。例えば、両プレイヤーが保証ゲーム型の、「かのような選好」を持っているとする。この場合には、 a_0b_0 と a_1b_1 が均衡点となり、互いに信頼があるならば a_0b_0 が実現する。「かのような選好」を手段的に用いることで、本来の選好から見ても、より良い帰結が実現しうる。

保証ゲーム型の選好（左の結果がより好まれる）

プレイヤーA : a_0b_0 a_1b_0 a_1b_1 a_0b_1

プレイヤーB : a_0b_0 a_0b_1 a_1b_1 a_1b_0

「かのような選好」の存在を仮定することの利点は、上述したコミットメントの事例だけではない。複数の選好の存在を仮定することの有用性を、センはいくつか指摘する⁶ (Sen 1977 : 338ff.)。センは、複数存在する選好に対する、メタランク付けが、様々に活かされうるとした。メタランク付けは、利己的か道徳的かの二分法を避け、より詳細な選好の評価を可能にする。また、メタランク付けはアクラシアの状態を表現しうるし、内省とコミュニケーションによって厚生関数を発見するための助けともなりうる。

以上のように、主体の利害関心・厚生・目標・選択が、単一の選好順序に要約して表現されたとする、主流派経済学の間人観を、センは、コミットメントという概念を提起することによって批判した。

2.3 センのコミットメント論に対する批判

上に述べたセンのコミットメント論に対しては、大きく分けて2つの側面からの批判が存在する。1つ目の種類の批判は、コミットメントがそもそも存在するか否かに疑問を呈し、2つ目の種類の批判は、複数の選好を用いてコミットメントを定式化することの妥当性に疑問を呈す。

⁶ Sen (1997:74-83)においても、センは複数の選好を仮定することの有用性を指摘する。センの他にも、複数の選好、あるいは効用関数を仮定することの、有用性を認める先行研究が存在する。Harsanyi(1955), Thaler and Shefrin(1981), Hirschman (1984), Schelling (1984), George(1984), Etzioni(1986), Lutz(1993), de Jonge(2005), White(2006), 等々がこのような先行研究に該当する。一方で、複数の選好を仮定することの意義を否定する見解として、Brennan(1989,1993)がある。また、哲学の分野においても、複数の選好を仮定することの意義が論じられている。Frankfurt(1971)を参照。

2.3.1 コミットメントの存在に対する批判

Pettit(2005)は、自己目標選択を侵害するコミットメント (goal-displacing commitment) の存在そのものに疑義を呈した。Pettit は大きくは2つの点から批判を加える (20f.)。1点目が、集団の目標追及と、主体自身の目標追及との整合性である。主体が集団の目標を追及することは、主体自身の目標を追及することと矛盾しない。集団で共有される目標は、同時に各構成員の個人的な目標でもある。もちろん、集団の目標は構成員の個人行動では達成されず、他者の助けが必要な場合がある。しかし、このことは集団の目標が、同時に各個人の目標であることとは矛盾しない。2点目が、コミットメントと心理学における常識との矛盾である。心理学においては、意図的な主体の行動は、ある条件を実現しようとする主体の欲望と、その条件を達成するための最適な方法についての信念によって、制御される。ここでは、主体が実現しようとする条件がコミットメントの文脈における、主体の目標に対応する。自己目標選択が侵害され、主体が自己の目標とは異なる基準に基づいて行動することは、心理学の常識と明らかに矛盾する。Pettit は、センが常識的心理学及び合理的選択理論を批判するに至ったのは、それらが想定する主体が自身の目標に制約された熟慮のみしか行えないとする、センの誤解に起因するとした (28ff.)。対照的に、合理的選択理論が想定する、自身の目標を最大限に実現しようとする主体の姿は、心理学の常識とまさに整合する (21)。

Vanberg(2008)は、帰結に対しての選好ではなく、行為に対しての選好 (preference over action) を導入することが必要だとした。この導入が行われると、自己目標選択を侵害するコミットメントは存在しなくなる (610f.)。セン自身が述べる通り、自己目標選択を侵害するコミットメントは、主体自身の目標ではない他の目標の追求によって生じる。これは Vanberg によれば、特定のルール of 遵守と捉えることができる。この種のルールの遵守は、行為に対しての選好を用いるならば、自己目標選択を侵害しない。主体がルールを遵守することは、主体自身の (行為に対しての) 選好と整合している。Vanberg はセンとは異なり、選好についての想定 of 妥当性に着目し、合理的選択理論を批判する。

Hanisch(2013)は、Pettit のセン批判が基本的には正しいとする一方で、その批判が誤った理由に基づいているとした (158)。自己目標選択を論じる際に Pettit は、他者の目標の中身と、他者の意図を区別していない。目標の中身の観点からすれば、自己目標選択は侵害されるが、意図の観点からすれば自己目標選択が侵害されないことがある。仮に、主体が自己の目標追求を取りやめ、他者の目標を追求するのだと、想定する。この目標の変更は、主体が自発的に行ったのかもしれないし、他者に強いられたのかもしれない。前者と後者の区別が、Hanish の言う、意図の観点に対応する。前者の場合には、意図の観点からして自己目標選択は侵害されない。センに対する直接的な批判として、Hanisch は、自己目標選択を侵害するようなコミットメントは、特殊な事例を除いて生じないことを指摘し

た。たとえ主体の目標が他者の目標に置き換えられた場合にも、その目標は主体の「消極的な目標」(negative goals)に暗黙に影響されている(170)。消極的な目標は規範的な制約であり、主体が取り入れようとする他者の目標に制限をかける。消極的な目標は、主体のアイデンティティが安定している限りで、主体の目標に常に影響を与える。消極的な目標の観点からすれば自己目標選択は基本的には侵害されない。しかし、特殊な事例において主体のアイデンティティが不安定になる場合には、消極的な目標の観点からも自己目標選択が侵害される⁷。

Cudd(2014)は、自己目標選択を侵害するコミットメントが、標準的な哲学理論において、行為主体性(agency)とのジレンマを抱えることを問題視した。ここでの行為主体性は、センの定義するそれとは異なることを注意されたい。自己目標選択を侵害するコミットメントは行為主体性を欠く。行為主体性を満たすコミットメントが存在したとすれば、それは自己目標選択を侵害しない(37)。この批判は、自己目標選択の侵害が心理学の常識と矛盾するとした、Pettitの批判と関連する。Pettitが提示した心理学の常識は、主体が常に行為主体性を持つこととも解釈できる。Cuddは上記のジレンマを解決する概念として、暗黙のコミットメント(tacit commitment)を定義する。暗黙のコミットメントは、主体の意識に上ることなく、暗黙に主体の行動を制御する(51)。暗黙のコミットメントは、慣習的規則よりも暗黙に作用する、外的な動機である。暗黙のコミットメントを行う主体は、自己目標選択が侵害される一方で、行為主体性が保たれ、上記のジレンマには陥らない。しかし、観察者からすれば、暗黙のコミットメントによる主体の行動は、主体のアイデンティティを示す行動として解釈される。

2.3.2 コミットメントを「かのような選好」で表すことへの批判

Hausman(2005)は、センが、自己目標選択を侵害するコミットメントを表現する際に、「かのような選好」を用いることに疑問を呈した。選好は、自己利益や欲望等によって定義されるのではなく、全てが考慮された順序(all-things-considered rankings)によって定義される。この定義は、単一の選好の枠組みを維持するので、主流派経済学に近いものである。考慮の対象となるのは主体に関連する全てであって、望ましさ、社会的規範、道徳原理、習慣等を含む(37)。Hausmanによれば、主流派経済学を批判するにあたっては、センのように異種の選好を導入するのは得策ではなく(49f.)、むしろ単一の選好の枠組みを維持しつつ、選好を決定する要因について反論すべきである。

Engelen(2017)は、単一の選好の枠組みを保持する点については、Hausmanに賛同する。

⁷ Peacock(2013)は、Hanisch(2013)へのコメントの中で、コミットメントが特例ではなく日常的な事例となるような、コミットメントの解釈を提示する。加えてPeacockは、規範遵守に関しての、Hanischの解釈とセンの解釈の相違を指摘する(226)。Hanischが規範遵守を目標に方向付けられた行動と捉える一方で、センはそうには捉えない。

全体を比較評価する単一の選好を用いることで、義務とコミットメントが主体にいかに関与を与えるかを、複数の選好を用いるよりも明確に表現することが可能となる（265）。しかし、Engelen は、単一の選好が Hausman のものよりも狭い意味で定義されるべきだとした。Engelen が定義する単一の選好は、主体の全ての動機が考慮されたものではなく、部分的な動機が考慮されたものにすぎない。主体の選択が行われるときには、選好には含まれない動機付けの因子が存在し、選好を介さずして選択に影響を与える（268）。これらの動機には、切望、義務、コミットメント等が含まれる。コミットメントが影響することによって、単一の選好が最も好む選択肢が、実際には選択されない場合がある。この場合のコミットメントは、Engelen によれば、センのように複数の選好の存在を仮定しても、適切に表現することができない。

3 良俗の一般的諸規則

センによれば、一般的諸規則は、自己目標選択を侵害するコミットメントと密接に関連する。『道徳感情論』において中心的な役割を果たすのが、中立的な観察者という概念であるが、一般的諸規則はこの概念を補完する役割を持つ。

3.1 中立的な観察者

『道徳感情論』における基礎的な概念が、「同感」(sympathy)である。同感とは、何らかの事柄に際して他者が抱く感情に、主体が接する際に生じる。同感とは、主体が想像の中で当事者の境遇に身を置き、当事者と同じ感情を共有することである (Khalil 2017: 230)。同感とは、人間が持って生まれた、他者との感情的な共鳴に根付く (Kiesling 2012: 307)。人間は「自分の利害に関係なくとも、他人の感情や行為に関心を持ち、それらを観察する……次に私たちがすることは、想像の中で自分を当事者の境遇に置いてみることで、当事者と同様の関係を対象と結んでみることである」(堂目 2008: 29)。同感の対象となる他者の感情は、現実に観察可能な他者の感情だけでなく、主体の想像上の感情も含まれる。死者に対してさえも同感が生じる (TMS: I.i.1.13)。

「中立的な観察者」(impartial spectator)とは、主体が自身の言動を制御する際に用いられる、想像上の観察者である⁸。主体が自身の言動の正当性を判断するには、言動をとる自分と、その言動を精査する自分の、「ふたりの人間に分割」しなくてはならない (TMS: III.1.6)。後者の役割を果たすのが中立的な観察者であって、この観察者は、言動が取られ

⁸ 中立的な観察者は、『道徳感情論』において、「胸中の人」、「胸中の神」、「内部の裁判官」等と、様々に表現されている。

る場面・状況を理解したうえで、当事者から離れた客観的立場に立ち、主体の言動を判断する。もし、この観察者が自身と利害関係があったり、自身に対して特別な好意や敵意を持ったりするのであれば、「自分の感情や行為の適切性について確信をもつことができる基準を与えてはくれない……それを与えてくれるのは私と利害関係にない、そして私に対して特別な好意や敵意をもたない」中立な観察者だけである（堂目 2008 : 34）。主体が自身の言動を正当とみなすためには、その言動の動機が、中立的な観察者によって同感される必要がある。中立的な観察者の影響力は大きく、「この内部の裁判官に相談することによってのみ、われわれは、自分自身に関連するどんなものごとでも、その本来の形と大きさにおいて、みることができ」る（TMS : III.3.1）。

中立的な観察者は、主体達が社会に出て他者を観察することによって、形成される⁹。『道徳感情論』における人間は、所属する社会と他者との相互作用によって、基本的に形作られる（Rasmussen 2014 : 245）。他者は主体にとって鏡のような存在であり、主体の言動がどのような時に是認されるのか、あるいは否認されるのかを、主体に示す¹⁰。自身の言動が他者に是認された場合に主体は喜び、否認された場合には主体は気持ちを落とす。そのため、主体は是認の喜びを得るために他者を注意深く観察するようになる。中立的な観察者の形成過程を、スミスは美醜についての観念の形成に例える（TMS : III.1.4）。美醜についての観念もまた、中立的な観察者と同様に、他者の判断を観察することにより形成される。他者から美しいと称賛されることによって主体は喜び、逆に、美しくないといふと非難されることで主体は気持ちを落とす。よって主体は、自身が他者からどのように見られているのかを、注意深く観察するようになる。他者を観察し彼らの判断を考察することにより、他者がどのような言動を是認あるいは否認するのか、主体は心中で想像できるようになる。他者は、「われわれが、ある程度他人の目をもって、われわれ自身の行動の適宜性を熟視することができる、唯一の鏡である」（TMS : III.1.5）。この鏡を参照することによって、中立的な観察者は形作られて行く。主体達の相互作用により、内面化された規範である中立的な観察者が形成される¹¹（Konow 2012 : 334）。

『道徳感情論』における主体は、心中に中立的な観察者を形成し、この観察者に是認されるように自身の言動を制御する。しかし、人間は、たとえ中立的な観察者の見方を認識

⁹ Den Uyl (2016 : 264)は、中立的な観察者と市場における価格を類比する。両者とも、社会的な相互作用から形成され、かつ、社会的に埋め込まれているが非人格的な現象である。他方、Bréban(2014)は、価格と幸福が共通の構造（gravitational theory）を持つとして類比する。なお、Kennedy(2015)は、スミスの重力（gravitation）のメタファーが、ニュートンのとはみなされないことを指摘する。

¹⁰ 坂本(2006)は、『人間本性論』におけるヒュームの鏡のメタファーと、スミスによる鏡のメタファーの相違を論じる。また、ヒュームの道徳哲学と、スミスのそれとの比較については、例えば、Rasmussen (2014 : ch.1)を参照。

¹¹ 内面化される規範は、Khalil(2017 : 224)によれば、既存の外的な社会規範ではない。

していたとしても、感情が高まると、その見方を無視してしまう弱さを持つ。このような状況を、スミスは「自己欺瞞」(self-deceit)と呼び、「この致命的な弱点は、人間生活の混乱の半分の源である」とした(TMS : III.4.6)。「人間は、一方で胸中の公平な観察者の声にしたがおうとしながら、他方で、それを無視しようとする矛盾した存在なのである」(堂目 2008 : 55)。人間が中立な観察者の立場に立ちえない根本原因は、「情念の激しさから生まれる人間の度しがたいパーシャリティにある」(田中 2017 : 122)。スミスは、主体による、自身の言動に対する判断を論じる際に、2つの異なる時点を想定する(TMS : III.4.2)。1つは、行為しようとする時の時点であり、もう1つは行為が完了した後の時点である。両方の時点において、人間は、中立的な観察者の見方とは異なる、自身に都合の良い見方をしてしまう。行為しようとする時の時点においては、主体の諸情動が激高し、あらゆるものが自愛心によって拡大され、歪んだ形で見えてしまう。行為が完了した後の時点においては、諸情念が静まりもっと冷静に行為を見られるが、それでも主体はまったく中立的な立場に立てるわけではない。自分自身を悪いと考えることは不快なことであり、むしろ、行為しようとする時点に抱かれた、誤った情念を激化させてしまうことがしばしばである。

3.2 良俗の一般的諸規則の機能と形成

自己欺瞞に対処するために有用なのが、「良俗の一般的諸規則」(general rules of morality)という複数の規則である。自己欺瞞に陥る人間を「救うのが道徳〔良俗〕の一般的諸規則による自己判断である」(新村 1994 : 183)。一般的諸規則は、中立的な観察者の判断と整合する規則であり、社会で共有される¹²。一般的諸規則と中立的な観察者は、それぞれが下す判断が一致する一方で、実際に主体の言動を制御可能か否かという点で異なる。中立的な観察者が主体の心中の判断基準に過ぎないのに対し、一般的諸規則は規則であって、しかも社会で共有されている。一般的諸規則によって人間は、行為の適宜性を、「その行為を受ける人が引き起こす自然な感情がどのようなものかを想像するよりも前に」判断することができる(堂目 2008 : 57)。一般的諸規則は、「中立的な観察者が是認するか否かについて我々が嘘をつく前に」、自己中心的な衝動を抑制する(Rasmussen 2014 : 51)。一般的諸規則が主体の心中に定着すると、それは、誤った自己中心的な感情を矯正するのに大いに役

¹² Tajima(2007 : 585)は一般的諸規則を制度の1つとみなす。諸規則によって導かれる行動は集合的行為とみなされる。高(2017 : 237-238)は、一般的諸規則を「習慣的思考」と呼ぶ。「習慣的思考とは、人間が社会という生活環境の中で経験的に学び、親から子へ、集団から集団へと累積的に引き継がれながら人間の『心に定着』した…思考習慣である」。また、Remow(2007)は、スミスの一般的諸規則とヒュームの一般的諸規則とに、注目すべき相違があることを指摘する。これらの間の相違については、新村(1994 : 183-184)もまた参照。

立つ (TMS : III.4.12)。自己欺瞞が生じそうなときにそれを抑制するのが、一般的諸規則への尊敬である。自己中心的な情念が最高に達したとしても、一般的諸規則への尊敬は捨て去られることはない。

中立的な観察者と一般的諸規則の違いを生み出す要因が、形成過程における、他者の観察の継続性と言えよう。一般的諸規則は、ある言動に対する他者の判断を「継続的な観察」(TMS : III.4.7) によって学習することで形成されるのであって、主体の一定以上の観察経験に基づく。スミスは、中立的な観察者について述べるときには、観察の継続性について言及しない一方で、一般的諸規則について述べる際には言及する。

一般的諸規則には、①非難される値うちがある行動についての諸規則と、②称賛される値うちがある行動についての諸規則の、2つの類型が存在する。非難される値うちがある行動とは、中立的な観察者に同感されないような行動である。称賛される値うちがある行動とは、反対に、中立的な観察者に同感されるような行動である。非難されるような行動に対する感情と、称賛されるような行動に対する感情は、質的に区別されると思われる。『道徳感情論』においては、様々な種類の感情の差異が言及されている¹³。2つの行動に対応する徳である、正義の徳と慈恵の徳もまた、その必要性や性質に関して区別されている。正義が必ず遵守されなければならないのに対して、「慈恵は常に自由」である (TMS : II.ii.1.3)。しかし、他者を継続的に観察することによって形成されるという点で、形式的に、2種類の形成過程は同様であるから、ここでは、①の非難される値うちがある行動について主に説明する。2種類の形成過程の差異は、第3章での定式化において考慮される。

一般的諸規則は、集団の外部から与えられる規則ではなく、人々の相互作用によって形づくられる。一般的諸規則の形成過程は他者を観察することから始まる (TMS : III.4.7)。他者の行動を繰り返し観察する中で、主体はある種の行動から衝撃を受ける。この種の行動とは、非難される値うちがある行動のことである。主体はこのような行動を見苦しいと感じる。そして、主体はその行動に対して周りの皆が自身と同様の嫌悪感を抱いているのを知ることとなる。他者が自身と嫌悪感を共有することを知った主体は、自身の感情が正当だという思いを強くする¹⁴。この経験が繰り返されることで、一般的諸規則は形成される。このように、一般的諸規則は「個別的な道徳判断をくりかえす経験の中から」帰納される (新村 1994 : 322)。一般的諸規則は「継続的な観察」(TMS : III.4.7) によって形成されるのであり、その形成は主体の「経験にもとづいている」(TMS : III.4.8)。一般的諸規則が形成されるには、主体が自身の感情の正当性を確信するに至る必要があるので、少ない回数の観察では不十分である。諸規則が形成されるためには、「継続的な観察」が行われ、多くの他者との感情共有が確認されなければならない。

¹³ 典型的には、悲哀に対する同感と歓喜に対する同感の区別である。歓喜に同感する性向は、悲哀に同感する性向に比べて遥かに強い (TMS : I.iii.1.5)。

¹⁴ この感情の共有に対して、スミス自身は、同感という言葉を用いない。しかし、観察主体もまた他者に同感される対象であるとみなすならば、この感情共有は、同感の1つとみなされる (新村 1994 : 323)。

第1章

主体が自身の感情の正当性を確信するに至ると、その次の段階として、自身がその行動をとった場面を想像する。自身が見苦しいと確信しているのだから、当然、自分がその行動をとった場合には、他者から見苦しいとみなされると主体は判断する。他者から見苦しいとみなされることを避けるため、主体はその行動はとるまいと決意する。かくして主体は、非難される値うちがある行動を取ってはならないとする、1つの一般的規則を形成する。この規則が形成される過程で、ある行動に対する、他者との感情の一致が確認された。他の主体も同様の過程を経るのであり、同様の一般的規則を形成する。

上の諸規則の形成過程では、非難される値うちがある行動に対する嫌悪感が、一般的諸規則の形成につながった。この嫌悪感を、称賛される値うちがある行動に対する好意に読み替えることで、②称賛される値うちがある行動についての諸規則の形成過程は説明される。この過程は、称賛される値うちがある行動に対する、主体の好意の正当性が、継続的な観察によって高められることによって進行する。この正当性が十分に高まった時、主体は、他者から好ましいとみなされたいがために、称賛される値うちがある行動をぜひとるべきだとする、1つの一般的規則を形成する。

3.3 最高存在の諸法としての良俗の一般的諸規則

前節で述べたように、一般的諸規則は、主体達による他者の継続的な観察によって形成される。この意味で、一般的諸規則は「神の超越的な秩序でもなく、有能な支配者の秩序でもない…庶民の中から確立された道德秩序である」（山口 2010 : 250）。しかし、一般的諸規則は、その形成が完了した後にやがて、最高存在の諸法であるとみなされ、人々から尊敬されるようになる（TMS : III.5.3）。同時に、一般的諸規則に従う者には最高存在が来世以降に報償し、逸脱する者には処罰するだろうとも、みなされるようになる。

これらの、形成過程とは異質と言える認識が人々の間に生まれる原因を、スミスは複数個挙げる。以下に、これらの理由について述べる。1つ目の原因は、道德的諸能力が「人間の支配的原理」である、ことである（TMS : III.5.5-6, 本段落中以下同様）。道德的諸能力は、現世での人間の行動を方向付けるために与えられたのであり、「われわれのすべての行為の最高裁決者」として、人間の全ての感覚、情念、欲求を監督し調整する。道德的諸能力は、視力、聴覚等の、他の感覚とは異なる水準にある。このように道德的諸能力は支配的原理であるのだから、それらが規定する一般的諸規則は、最高存在が人間の内面に設定した代理人達によって布告された、最高存在の諸命令及び諸法律とみなされる。加えて、一般的諸規則は、「報償と処罰という強制力」を伴うのであり、この諸規則を侵犯する場合には、主体に内面的恥辱感と自己非難の苦しみを与えられる。反対に、この諸規則に従順である場合には、主体に心の平静、満足、自己充足が与えられる。

別の原因としてスミスは、自然の創造者が人類を創造した意図についての、人々の認識

を挙げる (TMS : III.5.7)。人類創造における、自然の創造者の本来の目的とは、人類の幸福の促進であるが、人間が一般的諸規則に従うことはこの目的を促進するために最も効果的な手段である。反対に、一般的諸規則から逸脱することは、神の計画を妨害することであるし、自らが神の敵であることを宣言するようなものである。このため、人間は、一般的諸規則に従う際には神の好意と報償を期待するように、従わない場合には神の復讐と処罰を恐れるように、自然に気持ちを動かされる。

もう1つの原因としてスミスは、自然による繁栄と逆境の分配と、人間の自然な感情の相違を挙げる (TMS : III.5.8-11)。世界は無秩序に見える一方で、あらゆる徳には適切な報償が自然に与えられその実行が奨励される、という秩序が存在する。勤勉、慎慮には事業の成功という報償が与えられる。誠実、正義、人間愛の実行には、共に生活する者からの信頼、尊敬、愛情という、報償が与えられる。スミスは、この秩序を「繁栄と逆境がふつうに分配される一般的諸規則」と呼ぶ (TMS : III.5.9)。しかし、この自然が守る諸規則は、ある場合には、人間の自然な感情とは全く異なる。人間は、度量、寛容、正義に感嘆し、富と力の報償が与えられるべきだと思う。しかし、富と力というのは、正義等と不可分には結びついているわけではなく、慎慮と勤勉と熱意の結果である。自然が守る諸規則によれば、富と力を得るのに相応しい行いをしていないのであれば、度量、寛容、正義には富と力は結びつかない。また、人間は、欺瞞、虚偽等の行動をとる者に対しては、たとえ彼らが慎慮と勤勉の結果から富を得ていたとしても、彼らが得た財産を没収したいと願う。しかし、自然は、人間が抱く感情とは関係なく勤勉な悪漢に富を分配する。人間の無力な努力によっては、自然による分配を変更することはできない。人間は、悪行に対して悲しみ怒るが、しばしば、自然による分配を変更する程の力を持たないこと知る。そして、不正が勝ち誇ることを阻止する力が地上を見出すことに絶望するとき、人間は天に祈り、創造主が来世以降において不正な行いを処罰し、有徳な行いを報償することを希望する。このように、人間は「徳への愛」と「悪徳と不正への忌避」から、未来の状態についての信仰へ導かれる (TMS : III.5.10)。

以上に列挙した原因から生じる、一般的諸規則の遵守には来世以降に報償が与えられ、侵犯には処罰が与えられるという認識は、一般的諸規則に、この規則が最高存在の諸法であることとは別の「新しい神聖さ」を与える (TMS : III.5.12, 本段落中は同様)。この諸規則に従わないことには衝撃的に不適宜に見えるのであって、これは主体の「自己利害関心というもっとも強い諸動機」に強く支持されている。来世における最高存在の報償と処罰を信じる主体は、たとえその侵犯に現世での処罰が伴わないとしても、一般的諸規則を侵犯することはない。自らが常に神の眼下にあることに馴染みのある人間にとっては、この理解は、「もっとも頑固な諸情念さえも抑制しうる動機」である。

4 コミットメントと良俗の一般的諸規則

一般的諸規則が自己目標選択を侵害するコミットメントに密接に関わるという、センの見解は妥当であろうか。本節では、両者の非整合性を論証しセンの見解に疑義を呈す。一般的諸規則に従って行動することは、基本的には、自己目標選択を侵害しない。主体の自己目標の追求に、一般的諸規則は整合する。このことを、本章は2つの理由に基づいて論証する。

なお、本節は、一般的諸規則に従った行動が、主流派経済学の想定する狭隘な人間観に基づく行動であることを、主張するわけではない。一般的諸規則は社会的に共有される規則であって、狭隘な人間観に基づく行動とは矛盾する。本章の主張が意味するのは、一般的諸規則に従うことは、基本的に主体自身の目標追及によって導かれる、ということである。主体は、社会的な規則と整合的な、自己の目標を持ちうる。

4.1 形成過程に基づく理由

第1に、一般的諸規則は、その形成過程からすれば、主体の目標追求と基本的に整合すると言える。一般的諸規則が形成されるきっかけは、ある種の行動に主体が衝撃を受け嫌悪感を抱くことであった。他者も同様の嫌悪感を抱くことを継続的に観察することによって、一般的諸規則は形成に至るが、そのきっかけである嫌悪感は主体の自然な感情である。一般的諸規則は「究極的には、個々の事例において、われわれの道徳的能力、値うちと適宜性にかんするわれわれの自然な感覚が、なにを是認または否認するかについての経験にもとづいている」(TMS : III.4.8)。また、一般的諸規則の形成を決意するのは主体自身である。一般的諸規則は社会的な規則であると同時に、形成に携わった主体にとっては、自分自身の自然な感情に基づき、自発的に形成した規則でもある。

もちろん、子供世代のように、既に社会において形成された、一般的諸規則を受容する立場の人間は存在するであろう。しかし、この種の主体達の目標追求にもまた、一般的諸規則は基本的に整合するはずである。仮に、この種の主体達の目標追求と整合しないような一般的諸規則が存在したとしよう。この種の主体達は、自然な感情からは、今論じている一般的諸規則が正しいとはみなさない。この種の主体達が一定程度に社会に存在するようになると、今論じている一般的諸規則はもはや一般的諸規則の要件を満たさなくなってしまう。この般的諸規則が正しくないとなす人間が一定以上に増えれば、その形成過程において確認された、この規則の正当性についての各主体の確信は揺らぐ。正当性が確信されない規則は、一般的諸規則としての要件を満たさない。ただし、一般的諸規則が消失する過程が完了するまでの期間は、一般的諸規則が一部の主体の目標追求に整合しない。しかし、この期間はあくまで例外的状況であって、一定の時間が経過すれば、主体の目標追求に整合しない一般的諸規則は存在しなくなるだろう。

4.2 最高存在の諸法であることに基づく理由

第2に、一般的諸規則は最高存在の諸法とみなされるのであり、このことから、主体の目標追求と整合すると言える。人々は一般的諸規則が最高存在の諸法であるとみなし、その遵守と侵犯に、報償と処罰が伴うともみなす。報償と処罰が伴う規則であるという点で、一般的諸規則は、一見して、自己目標の追求に矛盾するように思える。しかし、一般的諸規則に報償と処罰が伴うとの認識は、自己目標の追求と矛盾せず、むしろ、自己目標の追求を合理化する。

主体が自己目標を設定する際の状況について、2つの場合が考えられる。①.一般的諸規則が最高存在の諸法であることを既に認識している場合と、②未だに認識していない場合である。①の場合には、一般的諸規則が最高存在の諸法であることは、1つの与件である。主体は、一般的諸規則に矛盾しない自己目標を設定する。一般的諸規則に従うことは「自己利害関心というもっとも強い諸動機」に強く支持される（TMS : III.5.12）。

②一般的諸規則が最高存在の諸法であることを未だに認識していない場合を考える。この場合には、主体は、自己目標の設定完了後に、諸規則が最高存在の諸法であることを認識する。主体の目標は、一般的諸規則と矛盾する可能性がある。しかし、矛盾が生じることは基本的にない。本節前半で述べた通り、基本的に、一般的諸規則は主体達の自然な感情に基づき、自発的に形成される。むしろ、主体が設定完了した目標は、諸規則が最高存在の諸法であるという認識によって、事後的に合理化される。

4.3 小括

以上のように、大きく2つの理由から、一般的諸規則に従って行動することは、基本的には自己目標選択を侵害しないと言える。センが自己目標選択を侵害するコミットメントに、一般的諸規則を関連付けたことは妥当ではない。

5 おわりに

本章は、センが、自己目標選択を侵害するコミットメントに、一般的諸規則が密接に関わるとした見解の妥当性を検証した。第2節において、センの主流派経済学批判の1つである、コミットメント論及び、それに対する批判について述べた。第3節は、『道徳感情論』における良俗の一般的諸規則を議論の対象とし、中立的な観察者との関係や、形成過程、

第1章

最高存在の諸法とみなされることについて述べた。第4節において、一般的諸規則が自己目標選択を侵害するコミットメントに、基本的には該当しないことを論証した。第1に、一般的諸規則は、その形成過程からすれば、主体達の目標追求と基本的に整合する。一般的諸規則は各主体が自然に抱く感情に基づき、自発的に形成されたものである。第2に、一般的諸規則は最高存在の諸法であり、それが来世以降に報償や処罰を与えるとの認識は、自己目標選択を合理化する。元来、主体達の目標追求と整合する一般的諸規則は、最高存在の意図に整合するという理由から合理化される。

本章におけるセンの『道徳感情論』解釈の再検討は、自己目標選択を侵害するコミットメントについての論争に、寄与する。自己目標選択を侵害するコミットメントの存在の有無が、第2節で述べた通り、論争の対象となっている。この種のコミットメントに一般的諸規則が密接に関連すると、センが述べたことは、この種のコミットメントが存在しないことを意味しかねない。一般的諸規則は自己目標選択を侵害しないから、一般的諸規則と密接に関連するコミットメントは、自己目標選択を侵害しないと考えられる。一般的諸規則は、センの論敵である、Pettit(2005)の主張とむしろ整合する。Pettitによれば、主体が集団の目標を追及することは、主体自身の目標を追及することと矛盾せず、集団で共有される目標は同時に各構成員の個人的な目標でもある。この主張が成り立つ一例として、一般的諸規則は位置づけられる。

第2章 補論：アマルティア・センの政治哲学における中立的な観察者解釈

1 はじめに

本章は、アマルティア・センの政治哲学における「中立的な観察者」(impartial spectator) 解釈を、考察の対象とする。本章により、センの『道徳感情論』解釈をより深く理解することが可能となる。また、中立的な観察者の判断は良俗の一般的諸規則（以下、一般的諸規則）と整合するから、本章の考察は、一般的諸規則の考察ともみなしうる。この意味で本章は、第1章・第3章における一般的諸規則についての議論を、補足する。

センは、アダム・スミス著『道徳感情論』¹の現代的意義を高く評価してきた²。政治哲学の文脈において Sen(2002)は、同書における中立的な観察者の持つ、中立性を「開いた中立性 (open impartiality)」と呼んだ³。それに対して、ロールズの無知のヴェールを持つ中立性を、「閉じた中立性 (closed impartiality)」と呼び、無知のヴェールが持つ問題点を、中立的な観察者のアプローチが回避しようとした⁴。

本章は、開いた中立性についての、センの議論について詳しく述べる。加えて、本章は、センが言及しなかった正義の徳の観点からも、中立的な観察者が開いた中立性と整合的であることを示す。

また、本章は、開いた中立性についてのセンの議論から一歩進み、政治哲学における中立的な観察者の有効性について論じる。センが主張する通り、中立的な観察者は開いた中立性を持っており、この点で無知のヴェールに比べて優れた概念と言える。とはいえ、中立的な観察者は中立的な判断を完全無欠に行う概念ではなく、非中立的な判断を下す場合もある。このことは、Golemboski(2018)らによって指摘された。しかし、Golemboski が言及しなかった複数の観点からも、同様の結論を導くことができる。本稿はこれらの観点から考察を進め、Golemboski の議論を補足する。

本章は以下のように構成される。第2節において Sen(2002)における、開いた中立性と閉じた中立性の議論について述べる。第3節において、正義の徳と開いた中立性の関係について論じる。第4節・第5節において、政治哲学における中立的な観察者の有効性を議論する。第4節において、Golemboski(2018)について述べた後に、中立的な観察者の形成過程についての記述と、慈恵と普遍的仁愛についての記述を考察する。第5節において、道

¹ 『道徳感情論』を引用する際には、(TMS : 「グラスゴウ版のパラグラフ番号」) の形式で、対応する箇所を示す。

² セン(2002)が典型的である。『道徳感情論』に限定しない、センのスミス評価については、坂本(2004)を参照。また、センの経済学と倫理学における研究全体については、鈴木・後藤(2001)が平易な解説を行っている。

³ Sen(2002)の本稿における訳語は、岡沢(2008)とは必ずしも一致しない。

⁴ Sen (2010)及びセン(2011)においても、Sen(2002)とほぼ同様の主張が展開される。

徳感情の腐敗についての記述を考察する。最終節において、本章の議論を総括する。

2 センの「開いた中立性」と「閉じた中立性」

2.1 「開いた中立性」と「閉じた中立性」

Sen(2002)は、『道徳感情論』における中立的な観察者が有する、中立性を「開いた中立性」(open impartiality)と呼んだ。それに対して、ロールズの無知のヴェールが有する中立性を、「閉じた中立性」(closed impartiality)と呼んだ。

「中立的な観察者」(impartial spectator)とは、主体が自身の言動を制御する際に用いられる、想像上の観察者である。主体が自身の言動の正当性を判断するには、言動をとる自分と、その言動を精査する自分の、「ふたりの人間に分割」しなくてはならない(TMS : III.1.6)。後者の役割を果たすのが中立的な観察者であって、この観察者は、言動が取られる場面・状況を理解したうえで、当事者から離れた客観的立場に立ち、主体の言動を判断する。もし、この観察者が自身と利害関係があったり、自身に対して特別な好意や敵意を持ったりするのであれば、「自分の感情や行為の適切性について確信をもつことができる基準を与えてはくれない……それを与えてくれるのは私と利害関係にない、そして私に対して特別な好意や敵意をもたない」中立な観察者だけである(堂目 2008 : 34)。主体が自身の言動を正当とみなすためには、その言動の動機が、中立的な観察者によって同感される必要がある

本章の議論の対象はセンの『道徳感情論』解釈であるから、ロールズ⁵のアプローチの詳細については立ち入らない⁶。

センは2つの中立性のアプローチを対比しそれぞれの有効性を検証した。閉じた中立性の問題点が指摘された後に、開いた中立性はその問題点を回避しうることが示された。閉じた中立性アプローチの持つ限界として指摘されたのが、手続き的偏狭、包摂的矛盾、排他的無視の3点である。本章は、中立的な観察者とは関係しない、包摂的矛盾については議論の対象外とし、手続き的偏狭と排他的無視を議論の対象とする。包摂的矛盾は、焦点集団の決定が、集団自体の大きさや構成に影響を及ぼし得る際に潜在的に発生しう(Sen 2002 : 448)。集団自体の大きさや構成が変更されることは、集団が閉じていることと矛盾する。集団が閉じていることを要請するアプローチ以外には、包摂的矛盾は問題とならない。中立的な観察者のアプローチには、そのような要請は存在しない。

⁵ ロールズの中立的な観察者解釈については、Raphael(2007 : 45-46)を参照。

⁶ 詳細については例えば、後藤(2002)を参照。同書は特に経済学との関連において、ロールズのアプローチについて論じている。

2.2 手続き的偏狭

センは中立性を論ずるにおいて、「焦点集団」(focal group)という概念を用いる。焦点集団とは、判断を行う主体となる、ある固定された集団を指す。

「手続き的偏狭」(procedural parochialism)とは、焦点集団が「焦点集団が共有する、偏見あるいはバイアス」に対処不可能なことを意味する (Sen 2002 : 447)。

センは手続き的偏狭に陥るアプローチの代表として、ロールズの無知のヴェールの下での選択を挙げ批判した⁷。無知のヴェールは、ある特殊な状況を想定して、推論を行うアプローチである⁸。推論の当事者たちは、自身の社会的地位・知力・体力を知らない想定される。加えて、当人の善の構想・心理に関する情報・社会の経済状況及び政治状況も知らない想定される。当事者たちが知っているのは、「彼らの社会が＜正義の状況＞の支配下にあるということおよびそれが含意することがらすべてに限られる」(ロールズ 2010 : 186)。

無知のヴェールの下における各主体は、焦点集団内のどの人物に自身が該当するのかわからない。そのため、各主体は自身のみ都合の良い偏った判断を避け、集団全体を考慮した判断を行う。しかし、この判断は、焦点集団外から見れば必ずしも中立的であるとは言えない。判断が行われる際には、あくまで焦点集団の利害関心のみが考慮されるのであって、集団外の人間の利害関心は考慮されない。ロールズの無知のヴェールは、焦点集団内の特定の構成員が共有する偏見を克服することはできても、集団全体で共有する偏見を克服することができない。手続き的偏狭は、閉じた中立性が普遍主義的な意図と結びつく場合には深刻な問題をもたらしうるが、ロールズの公正としての正義はまさにこの場合に該当する。

センは手続き的偏狭を論じる際に、文化集団特有の慣習について触れ、他の文化集団からの精査が必要だと主張する。センによれば、スミスもまた慣習の精査が必要だとする立場に立っていた。センは、『道徳感情論』第5部における、かつて存在した嬰兒殺しの慣習への言及に着目する。スミスは、高度に文明が発展していたギリシャの都市国家においてさえも、新生児を殺害する慣習が存在したことを指摘し、適宜性が慣習によって歪曲させられてしまう例とした (TMS : V.2.15)。

センによれば、自身から距離を置いて自身の感情が必要であるという、スミスの主張は、「既得権益の偏見だけでなく、確立された伝統、慣習の影響をも精査するという目的に動機付けられている」(Sen 2002 : 459)。スミスが挙げる嬰兒殺しやその他の例は、現代社会に直接関連しており、女性に対する石打ちや、中国等における選択的中絶といった、様々

⁷ 本稿が議論の対象外とする文脈における、センとロールズの対立については、セン(1999)、後藤(2002)第1章、セン(2011)第1部等を参照。

⁸ ロールズ(2010)は、特に第3章24節において無知のヴェールについて詳細に論じている。また、公理的手法によって、無知のヴェールを含めたロールズの格差原理を分析する取り組みが存在する。そのような諸研究については、後藤(2002)第7章を参照。

な慣習を検討する上で有用であるかもしれない。

センは、ロールズのアプローチに、スミスの推論との共通点が多数存在することを認めている。しかしセンは、ロールズのアプローチは「社会的慣習と偏狭な感情に対する適切で客観的な精査を補償する助けにはならない」と批判し、対照的にスミスから学ぶべきものがあると主張する（Sen 2002 : 459）。スミスによれば、自身の言動の適宜性を判断するには「自分たちを、いわばわれわれの自身の自然の地位から移動させて、われわれ自身の諸感情と諸動機を、われわれから一定の距離があるものとして見るように努力」しなくてはならない（TMS : III.1.2）。このスミスの主張は、「中立性の実践が（ローカルに閉鎖的であるよりむしろ）開放的であるべきである」という主張を含んでいる」（Sen 2002 : 460）。

2.3 排他的無視

「排他的無視」（exclusionary neglect）とは、「焦点集団の行う決定によって生活上の影響を被る、焦点集団外の人々の声を排除しうる」（Sen 2002 : 448）ことである。

焦点集団の決定が集団外部に何も影響を与えないと想定するのは、あまりに非現実的である。国境をまたがる決定に際しては、排他的無視は特に問題となる。

この問題に対処するためにロールズが導入する、国家間レベルの原初状態を、センは批判する。「国境をまたがって存するいろいろな人々が国家間（または『諸人民間の』）関係を通じて行動することのみに限定される必要はない。世界は…様々に区分されているのであり、地球上の全住民を別々の『国家』や『人民』に分割することが区分の唯一のやり方ではない」（Sen 2002 : 465）。異国民同士であっても、国家を介せずに人間は結びつくことができる」と、センは主張する。

国家を介在しない人間間の結びつきの例としてセンは、スーダンにおける不遇な女性を助けたいと願う、アメリカのフェミニストの例を挙げる。このフェミニストの不遇な女性に対する親しみは、必ずしも国家を通じて喚起される必要はない。フェミニストであるというアイデンティティは、ある国家の人民であるというアイデンティティよりも重要な場合がある。他の種類のアイデンティティもまた同様に、国家を介さない異国民間の結びつきを生じさせる可能性がある。

個人の場合と同様に、異国の集団同士の場合であっても国家を介さずに友好的関係を築くことができる。WTO に対しての抗議をセンは例に挙げる。国家を介することなく、シアトル・ワシントン・メルボルン・プラハ等の都市が、相関性を持った行動を取った。集団は国家を介在させるのではなく、アイデンティティを共有することによって結びつくことができる。

センは、排他的無視を克服するために、スミスの中立的な観察者に代表される開いた中立性のアプローチを、用いる利点として、人権の議論を取り上げる。人権は各人がある国

家のメンバーであることから導かれるのではなく、各人が人間であることから導かれそれぞれに付与される。例えば、拷問されない権利やテロの攻撃にさらされないという権利は、各人が所属する国家には関係なく主張されうる。国家の介在が不必要だとするのは、開いた中立性のアプローチも同様であって、このアプローチは国家を介せず人間同士を結びつかせる。開いた中立性のアプローチは、なぜ基本的人権が市民権や国籍を条件とする必要がないのかを、明確にする。

また、開いた中立性のアプローチによって、我々は、様々な立場の中立的な観察者達の洞察から利益を得られる。それらの洞察を精査することで、共通の理解が得られるかもしれない。また、仮に完備な順序が得られないとしても、理性的・整合的な決定が可能である。このことを、センは、社会的選択理論の研究成果を根拠に主張する。

2.4 センの解釈の補足

第3節において、センが言及しなかった正義の徳の観点からも、中立的な観察者が開いた中立性と整合的であることを示す。排他的無視について論じる際に、センは正義の徳についても言及することができた。『道徳感情論』第2部の正義の徳についての記述からは、スミスが排他的無視に強く批判的であったことがわかる。スミスは正義の徳が社会の存続に不可欠な徳であるとした。正義の徳は、否認されるのが自然な動機から他者に害をなすことを禁止するのであり、排他的無視を許容しない。

さらには第4節以降において、センの開いた中立性についての議論から一歩進み、政治哲学における中立的な観察者の有効性について論じる。センが主張する通り、中立的な観察者は開いた中立性を持っており、無知のヴェールに比べて優れた概念と言える。しかし、だからといって、中立的な観察者は中立的な判断を完全無欠に行う概念ではなく、非中立的な判断を下す場合もある。このことは、Golemboski(2018)によって指摘された。しかし、Golemboski が言及しなかった複数の観点からも、同様の結論を導くことができる。

Golemboski によれば、中立的な観察者は社会の慣習 (convention) の中に閉ざされている。このことは『道徳感情論』第3部の中立的な観察者の形成過程についての記述からも裏付けられる。同形成過程は、主体が他者の言動を繰り返し観察することによって進行するが、人間が観察できる集団の規模には限界がある。中立的な観察者の見方は、観察範囲外の人間の見方を考慮しておらず、ある集団に閉ざされている可能性がある。『道徳感情論』第6部の、慈恵と普遍的仁愛についての記述からも、中立的な観察者が手続き的偏狭に陥りうると解釈することが可能である。人間が考慮に入れられる他者の範囲には限界があり、自身に身近な存在や、自身が所属する社会に限られる。

また、道徳感情の腐敗論において、スミスは自身の道徳理論の綻びに言及している。この言及は、腐敗した中立的な観察者の存在を含意する。この観察者は、非中立的判断を行

う。

3 排他的無視と正義の徳

3.1 正義の徳

センは排他的無視の問題を解決するにおいて、中立的な観察者のアプローチが有用であるとした。このことは、センが言及しなかった、正義の徳についての議論からも言える。『道徳感情論』においてスミスは、言動を取る主体の側だけでなく、その言動に影響を被る他者の側を考慮することの必要性を強調した。そして、この考慮なくしては社会が成立しないとした。同書第2部における正義についての議論において、スミスは排他的無視に対して強く批判的な記述を残している。

『道徳感情論』第2部においてスミスは、「直接的同感」(direct sympathy)と「間接的同感」(indirect sympathy)を区別する(TMS : II.i.5.1)。直接的同感とは、言動を取る主体となる人間に対しての同感である。これは同書第1部において導入される、言動の動機に対する同感であって、この同感によって適宜性が定義される。間接的同感とは、言動に影響を受ける人間に対しての同感である。人間は自身の快苦の経験をもとに、他者の快苦に間接的に同感することができる(Cairns 1993 : 68)。他者のある言動によって有益な影響を受けた人間の、それに対する感謝の気持ちが間接的同感の対象の1つである。もう1つの対象は、有害な影響を受けた人間の、その悪影響に対する憤慨である。スミスは、言動が取られる際の動機だけではなく、その言動がもたらす帰結にも着目した。

直接的同感と間接的同感によって、値うちの徳と正義の徳⁹が定義される¹⁰。これらの道徳的な判断には、観察者の観点だけではなく、当事者の観点が必要である(Rasmussen 2014 : 47)。ある他者に有益な影響を与える言動が直接的に同感され、かつ間接的にも同感されるとき、その言動には値うちがある。値うちがある言動を見るとき、我々は行為者の親切心にも同感するし、それに喜ぶ受け手側の人間の感謝にも同感する。

正義とは、「否認されるのが自然な動機から、ある特定の人びとにたいして、現実的で積極的な害をなす」(TMS : II.ii.1.5)ことを避ける、ことである。正義の徳は、直接的に同感できないような、あるいは間接的に同感できないような、他者へ有害な影響を及ぼす言動を取ることを禁止する。正義の徳の遵守が、有害な言動の回避という消極的な効果を持つ

⁹ スミスと同様に、ヒュームもまた正義の徳を慈恵(値うちの徳に対応)から区別する(Khalil 2013)。

¹⁰ この定義の方法は、徳性の根拠を行為者の結果よりも、動機に強く求める伝統的徳性観とは似て非なる(田中 2017 : 105)。例えば、ハチスンは動機の仁愛性を必要条件とするが、スミスはそうにはみなさない。

に過ぎないことは、スミスの特色とも言える¹¹ (Hanley 2009 : 67)。

スミスは、他者へ有害な影響を及ぼす言動であっても、その動機が悪意に基づいていなければ、正義の侵害には当たらないとした (TMS : II.i.4.3)。行為者の動機が否認されないとすれば、悪意への直接的同感には存在しないのであって、正義の侵害は成立しない。純粋な善意からの行動が他者に迷惑をかけてしまうことがあるが、これは正義の侵害とはみなされない。

3.2 正義の徳と排他的無視

正義の徳は排他的無視の問題と直接的に関わる。排他的無視は、焦点集団の決定が外部に与える負の影響を考慮せずに為されることを意味するが、正義はこのような決定の禁止を要求する。決定に際して外部の集団を配慮しないことは、否認されるべき動機に該当する。仮に、決定が外部に及ぼす影響を検討したうえで、結果的にその決定が外部に悪影響を及ぼしてしまったならば、正義の侵害は成立しないだろう。この場合には、加害者の動機は否認されない。しかし、決定が外部に及ぼす影響が検討されないのだとしたら、正義の侵害が成立する。加害者が決定の悪影響を検討しそこなったことは、観察者が動機を否認する理由となる。

スミスは、値うちの徳は強制されるものではなく、その欠如が正当な処罰の対象にはならないとした。値うちの徳の不行使は、他者に対する積極的な害となるわけではなく (TMS : II.ii.1.3)、それがなくとも社会は存続できる。値うちの徳は建物の装飾にたとえられ、社会の存続にとって不可欠ではない。また、我々は値うちの徳が義務感からなされるのを望まない (TMS : III.6.4)。「慈悲的に見える行為が、単に義務感や社会的な慣習にしたがってなされたにすぎないとわかった場合、私たちは失望し、その行為に対する評価を下げるであろう」(堂目 2008 : 61)。

一方で、正義の徳については、その遵守が社会秩序の形成に不可欠であるとした¹²¹³。社会の秩序は「たがいに害をあたえ侵害しようと、いつでも待ちかまえている人びとのあいだには、存立しえない」(TMS : II.ii.3.3)。正義の徳は、「大建築物の全体を支持する支柱であ」り、「もしそれが除去されるならば、人間社会の偉大で巨大な組織は、一瞬に崩壊し

¹¹ スミスの定義する正義はある種の言動を禁止するという意味で、消極的なものであり、「正義についての現代の観念から離れているように思われる」(Raphael 2007 : 75)。

¹² モロウ(1992 : 95-96)は、正義の徳の遵守は最小限の基礎に過ぎないとし、社会的な統合には慈悲が必要だとした。正義を遵守するだけの人間は「自身の個性性についての社会的な意味を自覚していない。かれは、盲目的に、機械的に振舞っているにすぎない」。

¹³ スミスは正義の不可欠さを論じる際に、作用原因と目的原因を区別し、後者が軽視されがちなことを批判する (TMS : II.ii.3.5)。田中(2017 : 108)によれば、これは、スミスが「目的—手段の適合性のうちに神のデザインをみる自然神学観に」立脚していたことを意味する。

て」しまう (TMS : II.ii.3.4)。それゆえ、正義の徳は、他の徳と違って、法権力によって遵守が強いられうる (Hanley 2009 : 63)。正義の徳を守ることは、「われわれ自身の意志の自由にまかされず、力づくで強制されてもよく、その侵犯は憤慨の、したがって処罰的となる」 (TMS : II.ii.1.3)。一般的諸規則について論じる箇所でも、正義の徳が求める一般的諸規則については、他の諸規則とは異なり人間が厳密に従うべきであることが強調される¹⁴。「正義の諸規則にしっかり固執することには、杓子定規というものは存在しない」 (TMS : III.6.10)。

以上のように、スミスは、言動を取る主体だけでなく、その言動に影響を被る他者を考慮することを重要視していた。正義の徳が厳守されることで社会の秩序は保たれるのであって、スミスが排他的無視に対して強く批判的であったことは明らかである。この点についてもセンは、中立的な観察者のアプローチが開いた中立性を持つ論拠として、示すことができる。

4 手続き的偏狭について

4.1 Golemboski(2018)によるセン批判

本節から、開いた中立性についてのセンの議論から一歩進み、政治哲学における中立的な観察者の有効性について論じる。センが主張する通り、中立的な観察者は開いた中立性を持っており、この点で無知のヴェールに比べて優れた概念と言える。とはいえ、中立的な観察者は非中立的な判断を下す場合もある。このことを、Golemboski(2018)の議論を追うことによって示す¹⁵。

Golemboski(2018 : 175)によれば、『道徳感情論』を詳細に読解するならば、ある文化的文脈に制約された偏向が、中立的な観察者によって克服可能であるかは明らかではない。中立的な観察者は結局のところ、ある社会で得られた道徳規範の投影に過ぎず、その道徳規範に疑義を呈したり批判したりすることは不可能である¹⁶。

Golemboski は自身の主張の根拠として、センの『道徳感情論』解釈と整合しない、いくつかの先行研究を挙げる。Campbell(1971)によれば、中立的な観察者に語りかけることは、

¹⁴ Fleischacker(2004 : 155)は、スミスのいう正義の厳密性が2通りに解釈でき、曖昧であるとした。1つが正確さの厳密性であり、もう1つが強制力の厳密性である。

¹⁵ Sen(2002)の中立的な観察者解釈に対しては、Forman-Barzilai (2010 : 166-92)も疑問を呈す。また、Rasmussen (2014 : 50)によれば、中立的な観察者は「センが提唱する以上に文化に制約されている」。中立的な観察者の文化的な制約については、Fleischacker (2011 : 26-31)もまた参照。センのスミス解釈に対する「違和感」は、歴史家と理論家それぞれの、「関心の持ち方の乖離」に基づくのかもしれない (有江 2014)。

¹⁶ Golemboski と同様の見解を持つ文献として、例えば、鈴木(1992: 第6章)、新村(1994 : 324)が挙げられる。

特定の社会集団に属する構成員の通常の反応を照会する手短な方法に過ぎない。Golemboskiは, Campbellの見解は中立的な観察者を以下のように解釈するとみなす(181)。すなわち, 中立的な観察者は, 直接の隣人が自身の行動に対して下す評価を想像するのを容易にする, 社会的価値観の投影である。また, Griswold(1999)は, 中立的な観察者は公共性を人格化したものであり, 社会的統一のための道徳的要求の理想化であるとした。この見解から Golemboski は, 中立的な観察者が確立された文化的価値観の増幅装置として機能するとした。

Golemboski(2018 : 182)は, 2つの評価についてのスミスによる比較もまた, 自身の主張の根拠付けとした。スミスは, 道徳的評価と美醜についての評価を比較して, 両評価の共通点を指摘する。もし他者から評価を下されないとしたら, 人間は自身の顔が美しいのか醜いのかを判断することはできない。道徳的評価についても事情は同様であって, 人間は, 自身の振る舞いの適切性を他者の判断なしには判断できない。Golemboski は, 両評価についてのスミスのこの比較が, 社会的手段によって伝達され得られた基準に, 道徳的評価が依存することを, 意味するとした。道徳的評価の道具は社会の中で学習されるものである。

同感という概念の性質からも, Golemboski(2018 : 182-183)は中立的な観察者アプローチの持つ中立性に疑義を呈す¹⁷。同感が行われるとき, 主体は他者の立場に立ったときに何を感じるかを想像する。同感の対象は死者であっても構わないし, 知覚のない生物であっても構わない。同感とは, 同感を行う側の主体が実際に抱く考えに依存する。しかし, 中立性という概念にとっては, そのような主体の抱く考えを除去することによって, 正確に他者の状況に入り込むことが重要となる。もし主体の判断の中立性が特定の文化的偏向に制約されていたとしたら, 同感による中立性の評価は不可避免的に偏向している。ところが, 『道徳感情論』においては, 主体は道徳的評価を自身が属する社会の中で学習する必要がある, 特定の文化のバイアスに制約されている。中立的な観察者は, 閉じた中立性と同様の偏向に陥ってしまっている。

さらに, Golemboski(2018 : 183)は, スミスによる社会と鏡の類比からも, 中立的な観察者が特定の社会の偏向を免れないとする。スミスによれば, 人間は, 鏡がなくては自身の容姿を確認することができず, その良し悪しを判定することはできない。道徳的判断においては, 人間は社会なしには自身の言動の適切さを判定することはできない。Golemboskiによれば, スミスによる鏡の類比は, 鏡が, それが映し出す対象の本質を決定できないのと同じように, 社会に状況づけられた中立的な観察者の見方が道徳を完全には構成できないことを, 示唆している。鏡の表面が歪んでいれば, 歪んだ像が映し出されるのである。スミスが, 真の適宜性の他に, 完全ではない適宜性の存在を記述していたことを Golemboski は指摘する (TMS : VI.3.23)。

Golemboski は中立的な観察者が有効性を持つための, 道徳的多元主義的な解決策を論じ

¹⁷ 田島(2003 : 267-270)もまた, Golemboski とほぼ同様の疑問を呈す。

た¹⁸。この解決策については、センの『道徳感情論』解釈とは関係ないので説明を割愛する。

4.2 中立的な観察者の形成過程

Golemboski が指摘する通り、中立的な観察者は非中立的な判断を下す場合もある。このことは、Golemboski が述べなかった、中立的な観察者の形成過程の観点からも言える。本節はこのことを示し、Golemboski の議論を補足する。

4.2.1 中立的観察者の形成過程と一般的諸規則の形成過程

中立的な観察者は他者を継続的に観察することによって形成される、ロールズの無知のヴェールとは対照的な、経験的に形成される概念である。この点で2つのアプローチは大きく異なる¹⁹。

中立的な観察者の形成過程及び、一般的諸規則の形成過程については、第1章で既に詳説した。本節では、その要点を簡潔に記すこととする。

中立的な観察者は、主体達が社会に出て他者を観察することによって、形成される。他者は主体にとって鏡のような存在であり、主体の言動がどのような時に是認されるのか、あるいは否認されるのかを、主体に示す。自身の言動が他者に是認された場合に主体は喜び、否認された場合には主体は気持ちを落とす。そのため、主体は是認の喜びを得るために他者を注意深く観察するようになる。

この、他者の観察が継続的に行われることで、一般的諸規則が形成される。一般的諸規則は、中立的な観察者の判断と整合する規則であり、社会で共有される。一般的諸規則と中立的な観察者は、それぞれが下す判断が一致する一方で、実際に主体の言動を制御可能か否かという点で異なる。中立的な観察者が主体の心中の判断基準に過ぎないのに対し、一般的諸規則は規則であって、しかも社会で共有されている。

一般的諸規則は、集団の外部から与えられる規則ではなく、人々の相互作用によって形づくられる。一般的諸規則の形成過程は他者を観察することから始まる (TMS : III.4.7)。他者の行動を繰り返し観察する中で、主体はある種の行動から衝撃を受ける。この種の行動とは、非難される値うちがある行動のことである。主体はこのような行動を見苦しいと

¹⁸ Thunder(2016)は、Golemboski(2018)のインターネット先行公開版を批判した。Thunder が批判するのは、Golemboski の提示した道徳的多元主義を用いた、中立的な観察者アプローチの修正案の有効性であり、批判の対象は『道徳感情論』解釈ではない。

¹⁹ セン(2011)によれば、中立的な判断を行ううえでこの対照性は重大な意味を持つ。同書第1部における、「先験的アプローチ」と「比較によるアプローチ」の議論を参照。

感じる。そして、主体はその行動に対して周りの皆が自身と同様の嫌悪感を抱いているのを知ることとなる。他者が自身と嫌悪感を共有することを知った主体は、自身の感情が正当だという思いを強くする。この経験が繰り返されることで、一般的諸規則は形成される。一般的諸規則が形成されるには、主体が自身の感情の正当性を確信するに至る必要がある。少ない回数の観察では不十分である。諸規則が形成されるためには、「継続的な観察」が行われ、多くの他者との感情共有が確認されなければならない。

主体が自身の感情の正当性を確信するに至ると、その次の段階として、自身がその行動をとった場面を想像する。自身が見苦しいと確信しているのだから、当然、自分がその行動をとった場合には、他者から見苦しいとみなされると主体は判断する。他者から見苦しいとみなされることを避けるため、主体はその行動はとるまいと決意する。かくして主体は、非難される値うちがある行動を取ってはならないとする、1つの一般的規則を形成する。この規則が形成される過程で、ある行動に対する、他者との感情の一致が確認された。他の主体も同様の過程を経るのであり、同様の一般的規則を形成する。

4.2.2 中立的観察者の形成過程と手続き的偏狭

Golemboski の指摘は、中立的な観察者の形成過程についての記述からすれば正しい。中立的な観察者は、主体が他者の判断を観察することで形成されるが、その観察範囲は制約されている。人間が全世界の人間の言動を観察できると想定するのは、あまりに非現実的である。全世界を範囲とする観察は、スミスが生きた時代には当然不可能であつただろうし、通信技術が高度に発展した今の時代でさえも非現実的である。むしろ、人間が実際に観察できる範囲は自身の周囲に限定される。全世界の人間を観察するのは、神のような存在でなければ不可能である。ところが、中立的な観察者（一般的諸規則）は「神の超越的な秩序でもなく、有能な支配者の秩序でもない…庶民の中から確立された道德秩序である」（山口 2010 : 250）。よって、中立的な観察者（一般的諸規則）の見方は「諸個人の置かれた事情、状況、社会が異なれば、経験から導き出される諸規則の内容は異なるという環境被制約性を免れない」（田島 2003 : 113[引用文]、Rasmussen 2014 : 53）。

中立的な観察者の形成過程における観察範囲となる集団が、Golemboski が指摘するような、ある慣習を共有する集団と一致するかは定かではない。しかし、中立的な観察者の見方が、一定の集団内に制約されることは確かである²⁰。

²⁰ このことは、第3章・第4章のモデルにおいて、ダイナミクスがプレイヤー集合に制約されることに対応する。プレイヤー集合の性質に依存して、社会状態の挙動が決まる。社会状態は、各プレイヤーの規範的判断のベクトルであり、各プレイヤーの中立的な観察者を意味するとも解釈できる。

4.3 慈恵

Golemboski の主張は、『道徳感情論』第6部の、慈恵と普遍的仁愛についての記述からも補足することができる。慈恵 (beneficence) とは、慈愛の心をもって恵みを施すことであり、普遍的仁愛 (universal benevolence) とは、どんな境界にも限定されることのない、宇宙の無限性を包括しうる善意である (TMS : VI.ii.3.1)。通常の慈恵と普遍的仁愛は異なる性質を持ち、両者の間には「緊張」がある (Hanley 2009 : 187)。

スミスが展開する国境を越えた慈恵についての議論は、手続き的偏狭の議論に直接関係する²¹。国境を越えた慈恵についての議論は、異国の人々に対して人間がどの程度同感することができるのか、延いては、異国の人間の視点を自身の判断に取り入れることができるのかに、関わる。ある判断を行うにおいて、もし異国の人間の考えを考慮に入れることができず、専ら自国の人間の考えを考慮に入れるならば、その判断は手続き的偏狭に陥ってしまっている。そのような判断を行う人間達が形成する、中立的な観察者もまた、手続き的偏狭を回避することはできない。

以下に、『道徳感情論』第6部第2篇における、慈恵と普遍的仁愛の議論について述べる。スミスは、慈恵が向けられる対象の優先順位について、対象を個人と社会とに区別して論じる。これらの優先順位は自然の傾向であり、道徳的な義務であるともされた (Raphael 2007 : 76)。

4.3.1 個人に対して向けられる慈恵

『道徳感情論』第6部第2篇第1章においてスミスは、個人に対して向けられる慈恵を議論の対象とする。

第1に慈恵が向けられる対象となるのは、当然のことながら各個人自身である (TMS : VI.ii.1.1)。各人は全ての点において、他の誰の快樂と苦痛よりも自身の快樂と苦痛を鋭く感じる。そのため、他の誰についてよりも、自身について適切に配慮することができる。

他者に慈恵を向ける際に考慮される要素は4つあり、以下に述べる順に優先順位が高くなる (TMS : VI.ii.1.20)。

1つ目の要素が慣行的な同感の有無である (TMS : VI.ii.1.7)。慣行的な同感とは、多くの時間を共有することによって成立する、同感のことである。慣行的な同感の対象となるのは家族であり、まず初めに彼らが自然に慈恵を向けられる対象となる²²。我々は家族と多

²¹ 堂目(2008)は、慈恵と普遍的仁愛についての議論を材料として、国際秩序の可能性を論じる。堂目の議論は、本稿における中立性の議論と密接に関連する。中立的な観察者が、非中立性に陥るならば、国際秩序の成立は困難である。

²² Raphael (2007 : 77)は、慣行的な同感を原因とする、スミスの慈恵論を否定する。「家

くの時間を共有するのであり、どの他人よりもよく家族について知っている。家族に対する同感「正確かつ決定的」であり、主体が主体「自身について感じるものに、いっそう近づく」(TMS : VI.ii.1.2)。よって、我々は他人に対して同感するよりも、家族に対して同感することが多くなる。我々は自分自身の次には、家族について適切に配慮することが可能となる。

2つ目の要素が、善良な行動と振る舞いについての、尊敬と明確な是認の有無である(TMS : VI.ii.1.18)。善良な行動と振る舞いに対する同感、慣行的な同感とは異なるものであり、有徳な人々に対してのみ存在する。スミスは、有徳な人々に対する同感、慣行的な同感よりも格段に尊重されるべきとし、自然の同感(natural sympathy)と呼ぶ。有徳な人々に対する同感、永続的で確実である。

3つ目の要素が、慈恵の対象となる人物から、過去に慈恵を向けられた経験の有無である(TMS : VI.ii.1.19)。過去に慈恵を向けられた人物よりも、慈恵の適切な対象となる人間は存在しない。その人物は感謝の正当な対象なのであり、報償に値する。

4つ目の要素が、社会的地位の極端さである(TMS : VI.ii.1.20)。極度に貧乏でみじめな人間は、人々から同情を受けるため、慈恵が向けられる対象となる。対照的な境遇である、極度に裕福で有力な人間は、極度に貧乏な人間に増して慈恵が向けられる対象となる。裕福な人間に対して、我々は尊敬を抱くのであるが、これは社会の平和と秩序を保つために自然の創造主が判断を下した結果である。賢明さや有徳さに依存した社会秩序の維持は、富裕さや地位に依存した社会秩序の維持に比べて不確実である。賢明で有徳な人の洞察力であってさえも賢明さや有徳さを識別するのが困難であるのに対し、富裕さを識別するのは大衆であっても容易である。

スミスは、以上に挙げた4つの要素を基本として、慈恵の向けられる対象が決定されるとした。複数の要素が絡み合う場合にどの要素が優先されるかは、個々の事例における中立的な観察者の判断に委ねられる(TMS : VI.ii.1.20)。

4.3.2 社会に対して向けられる慈恵

『道徳感情論』第6部第2篇第2章においてスミスは、人間が社会に対して向ける慈恵について述べる²³。個人についての議論と同様に、まず優先的に慈恵が向けられる社会とは、各人自身が所属する国家である(TMS : VI.ii.2.1)。各人の取る行動の善悪は、家族や尊敬すべき人がともに属する国家の、幸福あるいは悲惨に大きな影響を与えうる。よって、我々

族間の愛情が実際に慣行的同感であるという彼の見解は、親に対する子どもの愛情や兄弟姉妹の互いの愛情には適用できるが、子どもに対する親の愛情には適用できない」。

²³ 本稿の議論に直接関係しないため説明を省略したが、この章においてスミスは体系の人に対する批判を展開する。Raphael (2007 : 78)はこの批判がフランス革命を念頭に置いたものとするが、異論が存在する。篠原(2009)を参照。

が属する国家は利己的な理由だけでなく利他的な理由からも、愛すべきものとされている。

対照的に、自身が属さない社会に対しては、慈恵が優先的に向けられるわけではない。「われわれ自身の国民にたいする愛によって、われわれはしばしば、どこでも近隣の国民の繁栄と拡大を、最も悪意ある猜疑と嫉妬をもってながめたいという気持になる」（TMS : VI.ii.2.3）。それぞれの国民は、他国の勢力拡大を見るとき自国が征服されることを予見してしまう。国民的偏見が生じるのは、自国を守るために生じる愛に基づいている。スミスはこのような国民的偏見を無くすべきだとし、むしろ隣国の発展を促進するように努力すべきだと主張する。国際間で成長を競うことは適切な競争なのであって、人類愛を発揮し嫉妬を慎まなければならない。

しかし、スミスは、我々が人類への愛を持たず自国のみを愛してしまいがちなのは、自然の創造主が考案した体系によるものとした。我々が専ら自国を愛してしまうのは、創造主が人間の能力の限界を考慮したからである。人類の社会の利益は、創造主が特定の一部分に人間の注意を向けたことによって、より望ましく促進される²⁴。

幸いなことに、国民的な偏見は近隣諸国を越えて拡大されることはほとんどない。しかし、遠方の諸国については、国民的偏見が生じにくいにはあるが、同時にそもそも関心が持たれにくい。イギリス人やフランス人は両国で争う一方で、中国や日本の繁栄にどんな種類の嫉妬も抱かない（TMS : VI.ii.2.5）。

4.3.3 普遍的仁愛

『道徳感情論』第6部第2篇第3章においてスミスは、普遍的仁愛について論じる。その内容は、同書第2部等で述べられる慈恵とは大きく異なっており、それが冒頭から表れている（Hanley 2009 : 187）。賢明有徳な人物はいつでも公共的利益のために、自分自身の利益を犠牲にすべきだと思っている²⁵。また自身の属する階層あるいは社会の利益を、それらを包摂するさらに大きな単位である、国家や主権の利益のために、犠牲にすべきだとも思っている。よって、「それらの下級の諸利益はすべて宇宙のもっと大きい利益のために、すなわち、神自身が直接の管理者であり指導者である、すべての思慮あり知性ある存在からなる大社会の利益のために」（TMS : VI.ii.3.3）も自身の利益を犠牲にすべきだと思っているはずである。

この度量の大きい見方は、けして人間本性の領域を越えるものではない（TMS:VI.ii.3.4）。例えば、愛する将軍とともに無謀な戦地に向かう兵士たちは、この度量の大きい見方を体現している。絶望的な戦地に赴く際に、兵士たちはまったく恐れず、通常の義務の退屈さ

²⁴ 田中(2017 : 400)によれば、この論理をスミスの保守性の表現としてのみ理解するのは誤りであり、商業社会の安定性の論証としても理解するのが適切である。

²⁵ Raphael (2007 : 79)が指摘するように、これはスミスによる規範的な記述であり、他箇所での「社会学的観察の記述的言語」とは対照的である。

以外に何も感じない。彼らは、「自身の小さな諸体系を、もっと大きなひとつの体系のために犠牲にする」(TMS : VI.ii.3.4)。

しかし、「宇宙という偉大な体系の管理運営、すなわち全ての理性的で感受性のある存在の普遍的な幸福についての配慮は、神の業務であって人間の業務ではない」(TMS:VI.ii.3.6)。人間の能力と理解力の弱さからすれば、配慮すべき適切な対象は、各個人の幸福、家族や友人、自らが属する国である。人間に求められているのは普遍的仁愛ではなく、自らに近い対象への慈恵である。この点からすれば、マルクス・アントニヌスが宇宙の繁栄についての瞑想にふけり、ローマ帝国の繁栄を軽視したのは誤りと言える。

4.3.4 手続き的偏狭と慈恵・普遍的仁愛

以上に述べた『道徳感情論』第6部における慈恵と仁愛についての議論は、中立的な観察者が中立的な判断に失敗する可能性の存在を、意味する。同書によれば、人間が配慮可能な人物の範囲は限定されている。

個人に向けられる慈恵についての議論によれば、最も自然な慈恵の対象は慣行的な同感が生じる、家族等の身近な者達である。遠方の人物にはそもそも慣行的と言えるほど頻繁には同感できず、慈恵が向けられにくい。他の2つの要素に関しても、やはり同様のことが成り立つと考えられる。有徳な人々を知るためにはその人物についてよく知る必要があるし、他者からの慈恵を経験するにはその人物に直接会う必要がある。

田中(2017 : 397)によれば、個人を対象とする「慈恵論の内実は…もっぱら慈恵感情の慣行性の明確化による慈恵の実態暴露にあった次第を示している」。慈恵を向ける際に考慮される4つの要素の中で、貧乏で惨めな人々の優先順位は最下位である。加えて、後述する道徳感情の腐敗論が、慈恵についての議論からは排除されている。これらの事実、上位の身分に対して同感が偏る、欺瞞の原理とまさに整合する。欺瞞の原理は、他者から配慮される対象が、上位の身分に偏ることを含意する。

社会に向けられる慈恵についての議論によれば、最も自然に慈恵が向けられるのは自身が属する社会である。近隣諸国に対しては偏見を抱きがちであるし、遠方の諸国にはそもそも関心が抱かれぬ。このように慈恵の対象が自国に偏るのは、自然の創造主が定めたことであって人類の利益に適っている。

普遍的仁愛についての議論によれば、人間はその弱さによって普遍的仁愛を持つことはできない。普遍的仁愛を行使すべきなのは神であって、人間は、家族であったり自国であったり、身近な対象へ慈恵を向けるのが適切である。

以上の結論からすれば、人間が配慮可能な人物の範囲は限定されていると判断せざるを得ない。異国の人間に対する配慮には限界があるのだから、彼らの視点を主体が自身の判断に取り入れることが可能なのかもまた、定かではない。主体の判断は中立性を欠きうる

のであり、そのような判断を行ってしまう人間達が形成する中立的な観察者もまた、中立性を欠きうる²⁶。

堂目(2008 : 132)や Golemboski (2018 : 184-190)が述べるように、国民的偏見は諸国民の交流によって将来的に解消することができるかもしれない。しかし、これはあくまで遠い将来の可能性に過ぎない。堂目は同時に、当時のヨーロッパの状況では、スミスはそれが不可能であるとみなしていただろうとも述べる。スミス自身は、現実的な国民的偏見の解消については述べていない。『道徳感情論』における記述を忠実に解釈する限りでは、中立的な観察者は、非中立的な判断を行う可能性がある。

5 道徳感情の腐敗と中立的な観察者

Golemboski の主張は、「道徳感情の腐敗」(corruption of our moral sentiments) 論からも補足することができる²⁷。道徳感情の腐敗論は、『道徳感情論』第6版において追加された議論であり、同書を理解するにおいて無視することができない重要性を持つ²⁸。田中(2000 : 123)、田島(2003 : 265)によれば、スミスが第6版を出版した最大の動機は道徳感情の腐敗論である²⁹。腐敗論は、スミスの思想の中で解決するのが最も困難な問題の1つとであり(田島 2003 : 256)、中立的な観察者の持つ中立性に綻びを生じさせる³⁰。

スミスによれば、「富裕な人びと、有力な人びとに感嘆し、ほとんど崇拜し、そして、貧乏でいやしい状態にある人びとを、軽蔑し、すくなくとも無視するという、この性向は、……道徳感情の腐敗の、大きな、そしてもっとも普遍的な、原因である」(TMS : I.iii.3.1)。

スミスは、徳の道 (the road to virtue) と財産の道 (that [the road] to fortune) という、2つの異なる倫理基準を区別する。徳の道に進むことは、「英知の研究と徳の実行」によつ

²⁶ 山本(2014 : 51)は、社会に向けられる慈恵についての議論を論拠として、本章と同様に、中立的な観察者の限界性を指摘する。

²⁷ Hill (2006)は、スミスの腐敗に対するアプローチを、腐敗についての伝統的議論の中に位置付けることを、試みる。また、スミス以外の様々な文脈における、腐敗という概念の歴史については、Buchan& Hill (2014)を参照。

²⁸ 田中(2000 : 122-123)は、スミスが現実の経済世界の認識を深めるにつれ、制度改革では解決されえない、人間本性に根付く問題を自覚したことが、道徳感情の腐敗論の加筆に繋がっているとする。先行する『国富論』第3版においても同様の影響が見られ、両書に連続性が見られる。

²⁹ 一方で、Raphael (2007 : 10-11)は、『道徳感情論』第6版とそれ以前の版との違いの中で、徳の性質についての議論が第6版で追加されたことを、重要視している。他の見解については田中(2017 : 343-344)を参照。田中(2017 : 76)は Raphael の解釈が「基本的誤り」を犯していると批判する。

³⁰ 田島(2003)は、スミスの他著作における腐敗論も範囲に含めて、道徳感情の腐敗論を論じる。同書では『道徳感情論』における腐敗論と、『国富論』における腐敗論の異質性が示される。

て尊敬を得ようとすることを意味し、財産の道に進むことは「富と地位の獲得」によって尊敬を得ようとすることを意味する (TMS : I.iii.3.2)。財産の道は、しばしば徳の道とは整合しない、悪徳と愚行を伴う。

2つの道は明確に異なる倫理基準であるが、混同されてしまうことが多い (TMS : I.iii.3.3)。スミスは、上位階級と、中位・下位階級の、2つの分離した集団を想定する³¹ (Brown 1994 : 35)。スミスの腐敗論の特徴は、この区別にある (Hill 2006 : 650)。中流及び下流の生活階級においては、両者はほとんど一致する一方で、上位の生活階級においては、両者は全く異なったものになる (TMS : I.iii.3.5-6)。上位の生活階級においては、「成功と昇進は、理解力があり豊富な知識をもった同等者たちの評価にではなく、無知高慢で誇りの高い上位者たちの、気まぐれでばかげた好意に依存する」 (TMS : I.iii.3.6)。

人々は上位の生活階級に憧れを持ち、上位者の言動を模倣する。これは、歓喜に同感する性向が悲哀に同感する性向より遥かに強いことに、起因する (Tajima 2007 : 591)。『道徳感情論』における基礎的概念である同感は、本質的に、道徳感情の腐敗を生じさせうるとも、みなされる (Brown 1994 : 36, 80-82, Griswold 1999 : 128)。

上位者が模倣の対象となることで、上位者における道徳感情の腐敗は、中位及び下位の階級においても進行する (TMS : I.iii.3.7)。上位の生活階級は服装のみならず、悪徳もまた流行させてしまう。人々は上位の生活階級に上り詰めるために、しばしば徳の道を軽んじ財産の道へ走る。野心的な人間は、一度上位階級に上り詰めてしまえば、それに至る以前の悪徳は覆い隠されるだろうと考える。法律を超越する地位にたどり着いた人間は、過去の悪徳を隠蔽することができる。中立的な観察者は、腐敗した上位階級を咎めるには力不足とも言える (Hill 2006 : 650-651)。しかし、隠蔽の試みは失敗に終わることが多い。また、仮に成功したとしてもその栄誉は汚れたものであり、内心では恥ずべきものであって、財産の道へ走る人間を苦しめ続ける。

道徳感情の腐敗論の存在によって、『道徳感情論』の「理神論的世界観にもほころびが生じている」と考えられる (柴田 2010 : 13-14)。さらには、「スミスの道徳哲学体系を破綻させる」とも解釈できる (田島 2003 : 264)。道徳感情の腐敗は、同書の社会秩序形成論に矛盾すると考えられ、同書を理解するにおいて無視することができない重要性を持つ³²。道徳感情の腐敗は、スミスによる、自身の道徳理論の綻びへの言及である。道徳感情の腐敗論を含む第6版における改訂は、「自らの社会科学体系の道徳性に対する疑問の増大に基づく」 (田中 1993 : 176-177)。

『道徳感情論』第6版の改訂は、スミスが道徳感情の腐敗を深刻に受け止めたことが、主要な原因であるとも考えられている (Dickey 1986 : 608, Evensky 1989 : 131, Dwyer 2005 : 684, 田中 2017 : 350-351)。改訂時にスミスにとって、道徳感情の腐敗は中心的な

³¹ 上位階級と下位階級の徳性の区別は『国富論』においても見られ、徳性の環境被規定性の重視が見て取れる (田中 2017 : 285)。

³² スミスの社会秩序形成論については、本稿の第3章第2節を参照。

第2章

課題であり、社会学的理論の再考を彼に促していた (Forman-Barzilai 2010 : 97)。第6版における他の、主な改訂箇所としては、第3部の良心論と、第6部の徳の性格論がある。これらの議論は、道德感情の腐敗という問題にスミスが対処するために、改訂されたとも解釈できる (田島 2003 : 266-267, 田中 2017 : 377)。例えば、新第3部では、「称賛にあたいすること」(praiseworthiness)への愛好、「非難にあたいすること」(blameworthiness)への恐怖を強調する、新たな議論が追加された。この追加からは、現実の観察者からの称賛・非難では道德の維持には不十分であると、スミスが考えていたことが、わかる。現実の観察者が腐敗しているとすれば、彼らによる称賛・非難は、他者の道德観に対して悪影響を及ぼすであろう。また、現実の観察者からの称賛を求め、非難を避けることが、道德感情の腐敗を生むとも考えられる。

道德感情の腐敗は、中立的な観察者の中立性を論じるにあたっても、重要である。道德感情の腐敗が生じているということは、一定程度の人数の、腐敗した倫理観を持った人間の存在を意味する³³。これは、中立的な観察者の形成過程を考慮すれば、腐敗した倫理観の中立的な観察者が存在しうることを、意味する。ある集団の道德基準が歪み腐敗しているならば、その集団の中立的な観察者は、腐敗を共有するだろう (Fleischacker 2011 : 28-29)。本来の中立的な観察者とは別に、腐敗した中立的な観察者が存在することは、中立的な観察者のアプローチの持つ、中立性の質を低下させる。腐敗した中立的な観察者は、徳の道と財産の道に関わる事柄については、中立的な判断ができない。この観察者は、財産の道に偏った判断を下してしまう。

6 おわりに

本章は、開いた中立性についての、センの議論について詳しく述べた (第2節)。加えて、本章は、センが言及しなかった正義の徳の観点からも、中立的な観察者が開いた中立性と整合的であることを示した (第3節)。また、本章は、開いた中立性についてのセンの議論から一歩進み、政治哲学における中立的な観察者の有効性について論じた。中立的な観察者の形成過程に、及び慈恵と普遍的仁愛に着目し (第4節)、最後に、道德感情の腐敗に触れた (第5節)。

本章の議論により、センの『道德感情論』解釈をより深く理解可能となることが期待される。また、中立的な観察者の判断は良俗の一般的諸規則と整合するから、本章の考察は、一般的諸規則の考察ともみなしうる。この意味で本章は、第1章・第3章における良俗の一般的諸規則についての議論を、補足する。

³³ このことは、一般的諸規則による行為の制御が機能しない可能性を意味する (Tajima 2007 : 589)。

第3章 『道徳感情論』における良俗の一般的諸規則形成の進化経済学的再解釈

1 はじめに

アダム・スミス著『道徳感情論』¹は、経済学の様々な研究成果の観点から再解釈され、その現代における意義が複数の側面から見出されてきた。ゲーム理論を用いて同書第3部における自己規制 (self-command) を再解釈するものや (Meardon & Ortmann 1996)、同書が行動経済学の研究成果を予見していることを示すもの (Ashraf *et al.* 2005)、同書を制度派経済学の観点から再解釈するもの (Tajima 2007)、行動経済学的なモデルとの差異を明らかにしつつ、効用関数を用いて同書における主体の行動を定式化するもの (Bréban 2012)、合理的選択理論の観点から再解釈するもの (Khalil 2017)、等が存在する。

しかし、『道徳感情論』には経済学の諸成果を用いて再解釈される余地のある、重要な概念が未だに存在する。本章は、『道徳感情論』における「良俗の一般的諸規則」(general rules of morality) (以下、一般的諸規則) の形成を、進化ゲームモデルの1つである、レプリケータダイナミクスを用いて再解釈する²。一般的諸規則は、主体達が他者を繰り返し観察することによって形成されるが、この形成過程は試行錯誤学習の1種とみなされる。このような主体の学習過程は、レプリケータダイナミクスを含む進化ゲームモデルにより定式化されてきた。

『道徳感情論』における主体達は、互いの言動を継続的に観察しあうことによって相互作用し、自ら一般的諸規則を形成する。そして、この諸規則に従って自身達の言動を制御する。このようなスミスの社会秩序観は、理神論的であるとみなされてきた。しかし、同書においては、道徳感情の腐敗に代表される、非理神論的と言える記述も存在する。本章は、これら2つの状況の混在についての、再解釈を提示する。

本章が提示する混在状況についての解釈は、道徳感情の腐敗に代表される、非理神論的状況についての議論に、寄与する。道徳感情の腐敗論は、同書の社会秩序形成論に矛盾すると考えられてきた。しかし、本定式化によって生じた解釈からすれば、理神論的状況と非理神論的状況は矛盾しないとも、考えられる。また、本章は、第1章で論じたセンの経済倫理学に対しての、含意を持つ。第1章で述べた通り、一般的諸規則は、自己目標選択に整合するコミットメントと基本的にみなされる。本章のモデルは、コミットメントの形成のモデルの1つと位置づけられる。

本章は以下のように構成される。第2節において一般的諸規則について説明する。第3節において、進化ゲームモデルを構築し、このモデルを分析する。第4節において、本モデルを用いて一般的諸規則の形成過程を再解釈する。最終節において、本章を総括し含意について述べる。

¹ 『道徳感情論』を引用する際には、(TMS : 「グラスゴウ版のパラグラフ番号」) の形式で、対応する箇所を示す。

² スミスの著作を進化的な視点から考察するのが Evensky(1998)である。本稿では、主体の判断の進化を考察対象とするが、Evensky は社会の進化を対象とする。

2 良俗の一般的諸規則

2.1 中立的な観察者

本節で述べるべきことは、第1章において既に述べられている。したがって、その要点を簡潔に記すこととする。

『道徳感情論』における基礎的な概念が、「同感」(sympathy)である。同感とは、何らかの事柄に際して他者が抱く感情に、主体が接する際に生じる。同感とは、主体が想像の中で当事者の境遇に身を置き、当事者と同じ感情を共有することである。

「中立的な観察者」(impartial spectator)とは、主体が自身の言動を制御する際に用いられる、想像上の観察者である。主体が自身の言動の正当性を判断するには、言動をとる自分と、その言動を精査する自分の、「ふたりの人間に分割」しなくてはならない(TMS : III.1.6)。後者の役割を果たすのが中立的な観察者であって、この観察者は、言動が取られる場面・状況を理解したうえで、当事者から離れた客観的立場に立ち、主体の言動を判断する。

中立的な観察者は、主体達が社会に出て他者を観察することによって、形成される。他者は主体にとって鏡のような存在であり、主体の言動がどのような時に是認されるのか、あるいは否認されるのかを、主体に示す。自身の言動が他者に是認された場合に主体は喜び、否認された場合には主体は気持ちを落とす。そのため、主体は是認の喜びを得るために他者を注意深く観察するようになる。

『道徳感情論』における主体は、心中に中立的な観察者を形成し、この観察者に是認されるように自身の言動を制御する。しかし、人間は、たとえ中立的な観察者の見方を認識していたとしても、感情が高まると、その見方を無視してしまう弱さを持つ。このような状況を、スミスは「自己欺瞞」(self-deceit)と呼び、「この致命的な弱点は、人間生活の混乱の半分の源である」とした(TMS : III.4.6)。

2.2 良俗の一般的諸規則

本節で述べるべきことは、第1章において既に述べられている。したがって、その要点を簡潔に記すこととする。

自己欺瞞に対処するために有用なのが、「一般的諸規則」(general rules of morality)という複数の規則である。一般的諸規則は、中立的な観察者の判断と整合する規則であり、社会で共有される。一般的諸規則と中立的な観察者は、それぞれが下す判断が一致する一方で、実際に主体の言動を制御可能か否かという点で異なる。中立的な観察者が主体の心中の判断基準に過ぎないのに対し、一般的諸規則は規則であって、しかも社会で共有されている。

中立的な観察者と一般的諸規則の違いを生み出す要因が、形成過程における、他者の観

第3章

察の継続性と言えよう。一般的諸規則は、ある言動に対する他者の判断を「継続的な観察」(TMS : III.4.7) によって学習することで形成されるのであって、主体の一定以上の観察経験に基づく。

一般的諸規則には、①非難される値うちがある行動についての諸規則と、②称賛される値うちがある行動についての諸規則の、2つの類型が存在する。非難される値うちがある行動とは、中立的な観察者に同感されないような行動である。称賛される値うちがある行動とは、中立的な観察者に同感されるような行動である。ここでは、①の非難される値うちがある行動について主に説明する。2種類の形成過程の差異は、後に定式化の段階で考慮される。

一般的諸規則は、集団の外部から与えられる規則ではなく、人々の相互作用によってつくられる。一般的諸規則の形成過程は他者を観察することから始まる(TMS : III.4.7)。他者の行動を繰り返し観察する中で、主体はある種の行動から衝撃を受ける。この種の行動とは、非難される値うちがある行動のことである。主体はこのような行動を見苦しいと感じる。そして、主体はその行動に対して周りの皆が自身と同様の嫌悪感を抱いているのを知ることとなる。他者が自身と嫌悪感を共有することを知った主体は、自身の感情が正当だという思いを強くする。この経験が繰り返されることで、一般的諸規則は形成される。一般的諸規則は「継続的な観察」(TMS : III.4.7) によって形成されるのであり、その形成は主体の「経験にもとづいている」(TMS : III.4.8)。一般的諸規則が形成されるには、主体が自身の感情の正当性を確信するに至る必要があるので、少ない回数の観察では不十分である。諸規則が形成されるためには、「継続的な観察」が行われ、多くの他者との感情共有が確認されなければならない。

主体が自身の感情の正当性を確信するに至ると、その次の段階として、自身がその行動をとった場面を想像する。自身が見苦しいと確信しているのだから、当然、自分がその行動をとった場合には、他者から見苦しいとみなされると主体は判断する。他者から見苦しいとみなされることを避けるため、主体はその行動はとるまいと決意する。かくして主体は、非難される値うちがある行動を取ってはならないとする、1つの一般的規則を形成する。この規則が形成される過程で、ある行動に対する、他者との感情の一致が確認された。他の主体も同様の過程を経るのであり、同様の一般的規則を形成する。

上の諸規則の形成過程では、非難される値うちがある行動に対する嫌悪感が、一般的諸規則の形成につながった。この嫌悪感を、称賛される値うちがある行動に対する好意に読み替えることで、②称賛される値うちがある行動についての諸規則の形成過程は説明される。

2.3 良俗の一般的諸規則と理神論

スミスは、人間がすべての場面で一般的諸規則に厳密に従うとはしていないし、従うべきだともしていない。とはいえ、スミスは、社会秩序を形成するうえで不可欠な役割を果

第3章

たす、正義の徳が求める行動の一般的諸規則に関しては、人間が厳密に従うべきだとした³。

「正義の諸規則にしっかり固執することには、杓子定規というものは存在しない」(TMS : III.6.10)。正義の徳とは、「否認されるのが自然な動機から、ある特定の人びとにたいして、現実的で積極的な害をなす」(TMS : II.ii.1.5) ことを、回避することである。正義の徳は、直接的に同感できないような、あるいは間接的に同感できないような、他者へ有害な影響を及ぼす言動を取ることを、禁止する。正義の徳の一般的諸規則は、ある行動をとるべきでないとする、諸規則に該当する。

正義の徳は、その遵守が社会秩序の維持に不可欠である。社会の秩序は「たがいに害をあたえ侵害しようと、いつでも待ちかまえている人びとのあいだには、存立しえない」(TMS : II.ii.3.3)。正義の徳は、「大建築物の全体を支持する支柱」であり、「もしそれが除去されるならば、人間社会の偉大で巨大な組織は、一瞬に崩壊して」しまう (TMS : II.ii.3.4)。それゆえ、正義の徳を守ることは、「われわれ自身の意志の自由にまかされず、力づくで強制されてもよく、その侵犯は憤慨の、したがって処罰の的となる」(TMS : II.ii.1.3)。スミスは、『道徳感情論』において、「正義の原理論と処罰の原理論とを完全に一体化し、正義と不正をいかに判断するのかという問題と処罰に値する罪悪をいかに判断するのかという問題を一括して」論じた (新村 1994 : 182)。

正義の一般的諸規則が人々の相互作用によって形成され、厳守されることで、社会秩序は形成される。このようにして社会秩序が形成されるように、人間社会は、「最高存在」(Deity)、すなわち自然の創造主に設計された。スミスの著作に見られる、「神聖な設計者」「偉大な技師」「宇宙の管理者」「全知の存在」「自然の創造者」等の用語は、創造主としての神を意味していた (山口 2014 : 109)。スミスの「基本的世界観によれば、神は『全知・全善』という属性を有し、またこの世を想像した創造主」である (村越 1999 : 40)。一般的諸規則は、上述のように、「あくまでも人間の現世における個々の経験の集積を通じてつくり出されたもの」(石沢 1990 : 37) だが、同時にそれは、最高存在の諸法であるともみなされ人々から尊敬される (TMS : III.5.3)。一般的諸規則は最高存在が「われわれの内面に設定した代理人たちによって布告された、かれの諸命令および諸法律とみなされるべきである」(TMS : III.5.6)。しかし、人間にとって、最高存在の設計の目的を意識して一般的諸規則を遵守することは稀である (TMS : II.ii.3.9)。人間が主に関心を持つのは、社会の維持への顧慮ではなく、限定された範囲の個別的顧慮に過ぎない (TMS : II.ii.3.10)。人間が、正義の一般的諸規則を遵守するのは、侵害を受ける個人への関心からであったり、侵害に対しての来世における処罰への関心であったりする (TMS : III.3.12)。このように、スミスは目的原因と作用原因とを明確に区別し、人間による正義の一般的諸規則の遵守を作用原因によって説明し、この遵守が、神の目的である社会秩序を形成するとした。

このスミスの社会秩序観は、理神論的であるとみなされてきた⁴。「理神論」(deism) と

³ 正義の徳とは対照的に、値うちの徳は強制されるものではなく、その欠如が正当な処罰の対象にはならないとされた。値うちの徳は「たとえて言うくと建物の装飾であり、その存在は快適なものであるが、社会の存続にとって不可欠というわけではない」(中谷 1996 : 13)。また、我々は値うちの徳が義務感からなされるのを望まない (TMS : III.6.4)。

⁴ スミス自身が理神論者であったか否かは、1つの論点である。石沢(1990)や山口(2014)はスミスを理神論者とみなす。理神論者でないとする立場の1つが、田中(1993)であり、

第3章

は、神が世界を創造したとみなす一方で、人間の活動への神の干渉を否定する、宗教観である⁵ (Morris 1883 : 10, Corfe 2007 : 54)。理神論という宗教観は、「神の発動性を宇宙の創造に限定し、創造されたのち、宇宙は神から独立的に自己展開の力を有するとし、あたかもネジを巻かれた時計のように、自動的に自らの委ねられたコースを進んでいくと見るものである」(山口 1983 : 88)。また、理神論は「奇蹟や啓示を否認し、宗教を合理的倫理学に解消する」(田中 1993 : 61)。理神論は、「西ヨーロッパ市民革命期の思想的主流であって、人間の理性による真理の認識とそれにもとづく人類の進歩の無限性に対する確信を基調とした啓蒙思想に立つ宗教観である」(石沢 1990 : 24)。一般的諸規則は、神から与えられるものではなく、人間が自ら形成するものであるから、理神論の考えた方に整合すると言える。

しかしながら、理神論的な一般的諸規則の形成とは、整合しないと思われる記述が、『道徳感情論』中に存在する。典型的には、第6版で追加された、「道徳感情の腐敗」(corruption of our moral sentiments) についての記述がそれに該当する⁶ (本稿第2章もまた参照)。道徳感情の腐敗論は、徳の道 (road to virtue) と財産の道 (that [road] to fortune) という、2つの異なる倫理基準についての議論であり、財産の道が社会で拡大することにより、一般的諸規則とは異質の、腐敗した倫理基準が確立されてしまうとした (TMS : I.iii.3.全体)。腐敗論の加筆は、スミスが第6版を出版した最大の動機とも言われている (田中 2000 : 123, 田島 2003 : 265)。スミスが腐敗論を加筆したのは、現実の経済世界の認識を深め、制度改革では解決されえない、人間本性に根付く問題を自覚したことによる⁷ (田中 2000 : 122-123)。道徳感情の腐敗論を含む第6版における改訂は、スミス自身の「社会科学体系の道徳性に対する疑問の増大に基づく」ものであった(田中 1993 : 176-177)。柴田(2010 : 13-14)が述べるように、道徳感情の腐敗論の加筆によって、『道徳感情論』の「理神論的世界観にもほころびが生じている」とも考えられる。さらには、「スミスの道徳哲学体系を破綻させる」ともみなされている (田島 2003 : 264)。道徳感情の腐敗論あるいはその他の根拠から、スミスは理神論者を装っていたとする立場がある⁸ (Lindgren 1973 : 148, Kristol 1980 : 204, ラファエル 1986 : 41-42, Kennedy 2011 : 400, Peach 2014 : 80)。

スミスは理神論ではなく自然宗教の伝統に立脚しているとした。田中の主張については村越(1999 : 38-39)もまた参照。無神論者であるとの見方もある (Minowitz 1993)。

⁵ Hefelbower(1920), Harrison (1990 : 62)もまた参照。

⁶ 腐敗論は、『道徳感情論』第1部第3篇第3章において展開されており、本稿はこの章を議論の対象とする。一方で、篠原(1998 : 106-107)は、道徳感情の腐敗論の「真実の対象は…第3部の増補部分に潜伏している議論のなかにみられる」との見解を持つ。

⁷ 田中は、先行する『国富論』第3版においても同様の影響が見られ、両書に連続性が見られるとする。一方で、田島(2003 : 259)は両書間に「明らかな緊張」を見る。

⁸ 理神論についての前注でも述べた通り、スミスの真の宗教的態度がいかなるものであったのかは、未解決の論争となっている。典型的な争点は「見えざる手 (invisible hand)」の解釈である。Hill(2001), Harrison(2011), Oslington(2012)を参照。

3 良俗の一般的諸規則形成の定式化

3.1 モデル

前節で述べた，一般的諸規則の形成過程は，主体の試行錯誤学習によって進行するとみなされる。①非難される値うちがある行動についての，諸規則について述べる。主体はまず，他者の見苦しい行動を観察し嫌悪感を持つ。その上で，他者が自身と同様の感情を抱くことを知ると，自身の感情が正当だという思いを強くする。これが継続的に繰り返されれば，一般的諸規則が形成される。一方で，他者が自身と同じ感情を抱かないことが観察された場合には，感情の正当性が確認されることはない。主体は，他者と感情を共有するか否かを判断基準として，自身の感情の正当性を試行錯誤的に学習し，一般的諸規則を形成する⁹。

この，試行錯誤学習による感情の正当性の上昇過程を，各主体がその感情を持つべきとみなす確率の，上昇過程とみなし，定式化する。本モデルにおけるプレイヤーは，2つの戦略の中から1つの戦略を確率的に選択する。プレイヤーの集合を $I = \{1, 2, \dots, n\}$ とし， $n = 2m (m \in \mathbb{N})$ とする。 $S_i = \{A, B\}$ をプレイヤー $i \in I$ の純粋戦略の集合とし， $x_i = (x_{iA}, x_{iB}) \in [0, 1]^2$ をプレイヤー $i \in I$ の混合戦略とする。 $x = (x_1, x_2, \dots, x_n) \in [0, 1]^{2 \times n}$ を集団の混合戦略プロファイルとし， θ を混合戦略プロファイルの集合とする。プレイヤー $i \in I$ は， $t \in \mathbb{N}$ 期に戦略 A を確率 $x_{iA}(t) \in [0, 1]$ で選択する。同様に，戦略 B を確率 $x_{iB}(t) \in [0, 1]$ で選択する。

2つの戦略は，例えば，ある特定の行動に対して，A がそれを非難するということを意味し，B が非難しないということを意味する，というように解釈される。本モデルでは，プレイヤーが戦略 A をとるということを，プレイヤーがある状況下において，戦略 A をとるべきだと考えていることとみなす。戦略 B についても同様である。プレイヤー i は， t 期に戦略 A を確率 $x_{iA}(t)$ で選択するべきと考えていることになる。プレイヤーの確率的な選択を仮定するのは，一般的諸規則が形成される前には，どの言動をとるべきかについて主体が不確実な判断を行うからである。一般的諸規則が形成される前の段階にあり，自己欺瞞に陥っている主体は，中立的な観察者の判断を無視してしまう可能性がある。主体は中立的な観察者と同じ判断をある確率で行うし，そうでない判断もある確率で行う。このような状態の主体ではあるが，他者の観察を繰り返すことで，中立的な観察者の判断の正当性についての確信度が上昇して行く。確信度が上昇するにつれて，主体が中立的な観察者と同様の判断を行う確率が増加する。そして，一般的諸規則が形成されるに至れば，確実に判断を行うことが可能になる。

試行錯誤学習を含む学習の過程は，進化ゲームモデルによって定式化されてきた。進化ゲームモデルには，レプリケータダイナミクス，模倣ダイナミクス，試行錯誤ダイナミクス，最適反応ダイナミクス等が存在する（大浦 2008）。本章は様々な進化ゲームモデルの中から，レプリケータダイナミクスを採用する。後述するように，本モデルは他者との感

⁹ 社会的学習による規範の形成は，その存在の証拠が，心理学の研究によって与えられている。子供は，他者を観察・模倣することにより，社会的行動を自発的に学習する（Bandura 1977, Rosenthal & Zimmerman 2014）。関連文献については，Henrich *et al.* (2005 : 813) を参照。

第3章

情共有の喜びをゲームの利得と解釈し、この喜びが大きい戦略ほど採用確率が増加し、最終的に一般的諸規則となる過程を定式化する。本モデルにおいては、各戦略の採用確率はもっぱら期待利得の大小に依存して変動する。他の進化ゲームモデルにおいては、期待利得の大小以外の要素がダイナミクスに影響する。そのような仮定を課すことは、実証研究との整合性という面では望ましいと思われるが、一般的諸規則についての、『道徳感情論』中の記述からは直接導かれない¹⁰。他者との感情共有が一般的諸規則の形成につながるといふ、同書中の記述を忠実に再現するために、本章はレプリケータダイナミクスを採用する。なお、一般的なレプリケータダイナミクスは、集団の状態が、各プレイヤー間のゲームの結果に依存して変化すると想定されるが、このモデルでは、プレイヤーの各戦略の採用確率の変化をモデル上に表現できない¹¹。よって、本章では一般的なレプリケータダイナミクスではなく、各プレイヤーの混合戦略の変化を考察対象とする、特殊なレプリケータダイナミクスを採用する。

本モデルにおいては、每期、 n 人のプレイヤー集合の中で、全プレイヤーが2人1組ずつランダムマッチングされる。マッチングされた2プレイヤーは、対戦において、相手の選んだ戦略を知る。この過程が一般的諸規則の形成過程における、他者を観察する過程に相当する。このマッチングと対戦が連続的に幾度も繰り返され、継続的な観察が行われると想定する。

各プレイヤーは利得最大化を目的として選択を行う。『道徳感情論』における主体が利得最大化を目的として行動するのは、一見して不適当だとみなされかねない。しかし、このように想定することは、スミス自身の記述と整合する。本モデルにおける利得は、一般的諸規則の形成過程における、他者との感情共有の喜びを意味する。この感情共有は、将来的な、他者からの自身に対する、同感の喜びを主体に想像させるだろう。主体は、他者の言動の観察結果から、将来に観察対象と同様の言動を自身がとった際に、他者から同感されるだろうことを、想像する。『道徳感情論』における主体にとって、他者に同感されることは喜びである¹²。利得の最大化は、想像される同感の喜びの最大化を意味するのであり、これを仮定することは自然であろう。

各プレイヤー i の x_{iA} は、各期のプレイヤー i の期待利得に応じて変化する。 $s_i \in S_i$ をプレイヤー i の純粋戦略とし、 $s = (s_1, \dots, s_n)$ を純粋戦略プロファイルとする。純粋戦略プロファイルの集合を、 $S = \times_{i=1}^n S_i$ とする。任意の純粋戦略プロファイル $s \in S$ について、プレイヤー i の利得を、純粋戦略利得関数 $\pi_i: S \rightarrow \mathbb{R}$ によって定義する。

混合戦略プロファイル $x \in \Theta$ がプレイされるとき、純粋戦略 $s = (s_1, \dots, s_n) \in S$ が採用され

¹⁰ 実証研究に整合するモデルの構築を課題とするのが、例えば、Roth & Erev(1995), Erev & Roth(1998)である。これらは、忘却や誤認等を導入した、強化学習モデルを用いた。

¹¹ レプリケータダイナミクスの一般的な解説としては、スミス(1985), Weibull(1997), 大浦(2008)等を参照。

¹² 「自然はかれ[人間]に、かれら[他者]の好意的な顧慮に喜びを感じ、好意的でない顧慮に苦痛を感じるように、教えた。自然は、かれらの明確な是認をそれ自体で、かれにとってもっとも嬉しがらせるもの、最も快適なものとし、かれらの明確な否認を、もっともくやしがらせる、もっとも不快なものとしたのである」(TMS : III.2.6)。

第3章

る確率を, $x(s) = \prod_{i=1}^n x_{is_i} \in [0,1]$ とする。

関数 $u_i: \mathbb{R}^{2 \times n} \rightarrow \mathbb{R}$ を以下のように定義する。

$$u_i(x) = \sum_{s \in S} x(s) \pi_i(s)。$$

関数 u_i は混合戦略 $x \in \Theta$ がプレイされるとき、プレイヤー i の期待利得である。プレイヤー i が純粋戦略 s_i をとる際の、混合戦略を $e_i^{s_i}$ と表す。その際の期待利得は、 $u_i(x_1, \dots, e_i^{s_i}, \dots, x_n)$ となる。

x の挙動を知るには、 $x_A = (x_{1A}, \dots, x_{nA}) \in [0,1]^n$ の挙動を知るだけで十分である。 x_A を社会状態と呼ぶ。 x_{iA} のダイナミクスを

$$\dot{x}_{iA} = [u_i(x_1, \dots, e_i^A, \dots, x_n) - u_i(x)] x_{iA},$$

とする。これは、ウェイブル(1999: 215)の方程式である。このダイナミクスは、ウェイブル(1999: 93)におけるダイナミクスと、変数は異なるものの、同様の方法で導出される。集団 i において、戦略 K をとる個体数を p_{iK} としたときに、 β を基礎適応度、 δ を死亡率とし

て、 $p_{iK} = [\beta + u_i(x_1, \dots, e_i^K, \dots, x_n) - \delta] p_{iK}$ となる。これと、 $x_{iK} = p_{iK} / \sum_L p_{iL}$ から、 \dot{x}_{iK} が導出

される。 $u_i(x_1, \dots, e_i^A, \dots, x_n)$ は純粋戦略 A をとった場合の、プレイヤー i の期待利得である。 $u_i(x)$ は、混合戦略 x がプレイされる場合の、プレイヤー i の期待利得であり、 $x_{iA} \cdot u_i(x_1, \dots, e_i^A, \dots, x_n) + x_{iB} \cdot u_i(x_1, \dots, e_i^B, \dots, x_n)$ となる。 $x_{iB} = 1 - x_{iA}$ より、 x_{iA} のダイナミクスから x_{iB} のダイナミクスが得られる。このダイナミクスにおいては、期待利得の高い戦略ほど採用確率の上昇が大きくなる。言い換えれば、感情共有の喜びが大きい戦略ほど採用確率の上昇が大きくなる。

プレイヤー i の利得は下の表のように決定されるとする。1行目の利得はプレイヤー i が戦略 A をとるときに得る、利得である。2行目の利得はプレイヤー i が戦略 B をとるときに得る、利得である。

$i /$ 相手	戦略 A	戦略 B
戦略 A	a_{AA}^i	a_{AB}^i
戦略 B	a_{BA}^i	a_{BB}^i

表：プレイヤー i の利得

ここで、 $\alpha_i \equiv a_{AA}^i - a_{BA}^i$, $\beta_i \equiv a_{AB}^i - a_{BB}^i$, とする。本ダイナミクスの連立微分方程式は、以下の通りになる。 $u_i(x_1, \dots, e_i^A, \dots, x_n) = a_{AA}^i (\sum_{j \neq i} x_{jA} / n - 1) + a_{AB}^i (1 - (\sum_{j \neq i} x_{jA} / n - 1))$, $u_i(x_1, \dots, e_i^B, \dots, x_n) = a_{BA}^i (\sum_{j \neq i} x_{jA} / n - 1) + a_{BB}^i (1 - (\sum_{j \neq i} x_{jA} / n - 1))$ から、 \dot{x}_{iA} が導出される。

$$\begin{aligned}
\dot{x}_{1A} &= \left((\alpha_1 - \beta_1) \left(\sum_{j \neq 1} x_{jA} / (n-1) \right) + \beta_1 \right) x_{1A} (1 - x_{1A}), \\
&\vdots \\
\dot{x}_{iA} &= \left((\alpha_i - \beta_i) \left(\sum_{j \neq i} x_{jA} / (n-1) \right) + \beta_i \right) x_{iA} (1 - x_{iA}), \\
&\vdots \\
\dot{x}_{nA} &= \left((\alpha_n - \beta_n) \left(\sum_{j \neq n} x_{jA} / (n-1) \right) + \beta_n \right) x_{nA} (1 - x_{nA}).
\end{aligned}$$

この連立微分方程式より、全ての端点が平衡点であることがわかる。

本章は3種類の利得表の存在を仮定し、それに応じて3種類のプレイヤーを定義する¹³。

プレイヤー*i*の利得が、 $\alpha_i > 0$, $\beta_i < 0$ を満たすとき、このプレイヤーを、**同調タイプ**とする。同調タイプは、自身の取る戦略を固定した時に、対戦相手と戦略が一致した場合の方が、一致しない場合に比べて利得が大きくなる。対戦相手と戦略が一致するということは、相手と感情を共有することを意味する。同調タイプのプレイヤーは、相手と感情を共有したときに、そうでないときに比べて喜びが大きくなる。

プレイヤー*i*の利得が、 $\alpha_i > 0$, $\beta_i > 0$ を満たすとき、このプレイヤーを、**A タイプ**とする。A タイプのプレイヤー*i*は、対戦相手の戦略がいずれの場合にも、戦略 A のもたらす利得が、戦略 B のもたらす利得より大きくなる。このタイプのプレイヤー*i*は、戦略の変化が相手プレイヤーの戦略に依存せず、定義域内では平衡点を除いて常に $\dot{x}_{iA} > 0$ が成り立つ。

プレイヤー*i*の利得が、 $\alpha_i < 0$, $\beta_i < 0$ を満たすとき、このプレイヤーを、**B タイプ**とする。B タイプのプレイヤー*i*は、対戦相手の戦略がいずれの場合にも、戦略 B のもたらす利得が、戦略 A のもたらす利得より大きくなる。このタイプのプレイヤー*i*は、戦略の変化が相手プレイヤーの戦略に依存せず、定義域内では平衡点を除いて常に $\dot{x}_{iA} < 0$ が成り立つ。

以上のタイプに加えて、例えば、 $\alpha_i < 0$, $\beta_i > 0$ を満たすようなプレイヤー*i*を想定することも可能であるが、本章はこのようなプレイヤーの存在を想定しない。このようなプレイヤーは、戦略 A と戦略 B のどちらを取ったときにも、対戦相手と戦略が異なる場合に、そうでない場合に比べて利得が増える。これは、感情共有の喜びが、その感情の正当性を高め、対応する戦略の採用確率を高めることと、整合しない。A タイプと B タイプについては、どちらかの戦略で、対戦相手と採用戦略が一致したときに、そうでないときに比べ

¹³ 本モデルにおいては、各プレイヤーの利得表が異なるという意味で、プレイヤー間に異質性がある。本モデルにおいては、異質なプレイヤー達が、互いに選択を観察しあうという意味で相互作用し、自身の判断（混合戦略）を変化させる。このような、異質な主体間の相互作用は、社会動学において、確率的動学システム理論やシミュレーションを用いて考察されてきた (Durlauf & Young 2001)。本モデルは、簡素な構造を持つ社会動学モデルの1つと位置付けられる。

第3章

て利得が大きくなる。

試行錯誤学習と本ダイナミクスの整合性について、補足する。本ダイナミクスには、試行錯誤学習と一見整合しないような、場合が存在する。全プレイヤーが A タイプの場合を想定する。この場合には、平衡点以外で任意のプレイヤー i で $\dot{x}_{iA} > 0$ が成り立つから、試行錯誤の要素がなく、戦略 A の採用確率が上昇するように一見思われる。しかし、このケースの背後には、試行錯誤学習が存在する。本ダイナミクスが表しているのは、 x_A の変化の期待値であり、 x_A の平均的な変化である。仮に、期待値を用いず、シミュレーションを行って本ゲームを考察することを考える。この場合には、毎ゲームに各プレイヤーが選ぶ戦略は 1 つだけだから、 x_A は期待値通りには変化しない。変化の仕方は相手の戦略に依存するため、4 通りがある。この 4 通りの中には、全プレイヤーが A タイプであっても、戦略 A の採用確率が減るような場合が含まれる。平均的には、試行錯誤の要素がなく戦略 A の採用確率が上昇するが、個々のゲームにおいては、試行錯誤的な変化（戦略 A の採用確率の上昇と下降）が生じる。確率的モデルを分析するにおいて、期待値を用いるのは標準的な手法である。この手法を採用するため、本ダイナミクスでは、試行錯誤学習と一見整合しないようなケースが生じる¹⁴。

α_i と β_i を変化させることによって、2 つの種類の一般的諸規則の形成過程の相違が、モデル上に表現されうる。2 つの種類とは、①非難される値うちがある行動についての諸規則の形成過程と、②称賛される値うちがある行動についての諸規則の形成過程である。①の過程における各プレイヤーの α_i と β_i と、②の過程におけるそれを区別することを、考える。 α_i と β_i の絶対値は、他者と戦略を共有した際の喜びと、そうでない場合の喜びとの差である。この絶対値は、他者と戦略が共有されない場合の、落胆の程度を表す数値と解釈できる。落胆の程度は、①に該当する行動と②に該当する行動では異なると思われる。①の行動の代表例は正義の侵害であり、②の行動の代表例は慈恵である。スミスによれば、慈恵は無償であって、その欠如は憤慨の自然な対象とはならないが、正義の侵害は憤慨の自然な対象となる(TMS : II.ii.1.3-5)。よって、他者と戦略が共有されない場合の落胆は、憤慨が伴う、①の行動の方が大きいと思われる。

3.2 ダイナミクスの分析

一般的諸規則を定義する。

定義 一般的諸規則

社会状態 $(0,0, \dots, 0)$ が実現しているとき、あるいは、社会状態 $(1,1, \dots, 1)$ が実現しているとき、一般的諸規則が存在している。

¹⁴ 試行錯誤学習の代表的進化ゲームモデルと言える、Erev&Roth(1998)のモデル(2019/1/02 時点、google scholar 上で 1996 回の被引用)は、シミュレーションモデルである。このモデルであっても、ダイナミクスの期待値に着目すれば、本モデルのような、試行錯誤学習と一見整合しない場合が生じうる。大浦(2008)の第 4. 3 章を参照。

第3章

一般的諸規則が存在するときには、各主体が自身の戦略の正当性を確信するため、各プレイヤーが戦略 A を取る確率は、0あるいは1となる。加えて、一般的諸規則は社会で共有されるから、全プレイヤーの混合戦略が一致する。

これより、本ダイナミクスを分析し、その性質を調べる。命題1から命題3は、一般的諸規則の漸近安定性についての命題であり、命題4は内点平衡点についての命題である。漸近安定点は、その近傍から出発する軌道が、いずれその点自体に収束するような点である。漸近安定点は微小な変化に対して安定な平衡点であり、モデル外の変動に対して頑強と言える。進化ゲームモデルにおいては、漸近安定点が、ダイナミクスの収束先の候補とされている。複数の漸近安定点が存在する場合には、ダイナミクスの具体的な収束先は、初期点とモデル外の変動に依存して、決定される。

本ダイナミクスの連立微分方程式の、 i 番目の方程式を $f_i(t)$ とする。この連立方程式のヤコビ行列は、 i 行目の対角成分において、

$$\frac{\partial f_i(t)}{\partial x_{iA}} = \left((\alpha_i - \beta_i) \left(\sum_{j \neq i} x_{jA} / (n-1) \right) + \beta_i \right) (1 - 2x_{iA}).$$

また、ヤコビ行列は非対角成分 $j \neq i$ において、 $\frac{\alpha_i - \beta_i}{n-1} x_{iA} (1 - x_{iA})$ 、となるから、平衡点においては非対角成分が0となる。ある平衡点が漸近安定となる必要十分条件は、ヤコビ行列が安定となることである。全ての非対角成分が0となるので、ヤコビ行列が安定となる必要十分条件は、全ての対角成分が負となることである。

命題1：いずれか1つの一般的諸規則が漸近安定となるための必要十分条件は、1) あるいは2) の、いずれか1つが成り立つことである。

1) $(1,1, \dots, 1)$ が漸近安定：プレイヤー集合が、A タイプのみで構成されるか、A タイプと同調タイプの2タイプで構成される、

2) $(0,0, \dots, 0)$ が漸近安定：プレイヤー集合が、B タイプのみで構成されるか、B タイプと同調タイプの2タイプで構成される。

証明

社会状態 $(1,1, \dots, 1)$ が漸近安定となる必要十分条件は、対応するヤコビ行列の対角成分がすべて負となることである。ヤコビ行列の対角成分は第 i 行で $-\alpha_i$ となるから、全て負となるためには、各プレイヤーがA タイプあるいは同調タイプでなければならない。

社会状態 $(0,0, \dots, 0)$ が漸近安定となる必要十分条件は、対応するヤコビ行列の対角成分がすべて負となることである。ヤコビ行列の対角成分は第 i 行で β_i となるから、全て負となるためには、各プレイヤーがB タイプあるいは同調タイプでなければならない。

以上から、プレイヤー集合が同調タイプのみで構成されるときには、両方の一般的

第3章

諸規則が漸近安定となる。

したがって、2つの一般的諸規則の内、 $(1,1, \dots, 1)$ のみが漸近安定である必要十分条件は、1) プレイヤー集合が、A タイプのみで構成されるか、A タイプと同調タイプの2タイプで構成されることである。また、2つの一般的諸規則の内、 $(0,0, \dots, 0)$ のみが漸近安定である必要十分条件は、2) プレイヤー集合が、B タイプのみで構成されるか、B タイプと同調タイプの2タイプで構成されることである。

証明終わり

命題1より、いずれか1つの一般的諸規則が漸近安定となるためには、1) か2) のいずれか1つが満たされなければならない。この条件が成り立つときには、一般的諸規則のうち1つが収束先の候補となる。なお、他の平衡点の漸近安定性については、この命題では何も述べられていない。

命題2： 命題2：一般的諸規則が、各プレイヤーの α_i と β_i の大小に関わらず漸近安定となる、唯一の点となる必要十分条件は、1) あるいは2) の、いずれか1つが成り立つことである。

- 1) $(1,1, \dots, 1)$ が漸近安定：プレイヤー集合が、A タイプのみで構成される、
- 2) $(0,0, \dots, 0)$ が漸近安定：プレイヤー集合が、B タイプのみで構成される。

証明

社会状態 $(1,1, \dots, 1)$ が、 α_i と β_i の大小に関わらず漸近安定となる、唯一の点となる、必要十分条件が、1) であることを示す。社会状態 $(1,1, \dots, 1)$ が唯一の漸近安定点であるのに、B タイプか同調タイプの、プレイヤーが存在したとする。B タイプの場合、 $(1,1, \dots, 1)$ の近傍において、このプレイヤーに該当する成分で、 $\dot{x}_{iA} < 0$ が成り立つ。これは $(1,1, \dots, 1)$ が漸近安定でないことを意味し、矛盾である。同調タイプの場合、 α_i と β_i の大小によっては、他の点が漸近安定となりうるから矛盾する。同調タイプのプレイヤーの人数を、 E とする。同調タイプの各プレイヤーに対応する成分が0で、残りのA タイプの各プレイヤーに対応する成分が1となる、社会状態を考える。同調タイプのプレイヤーの1人を、 j とする。この社会状態のヤコビ行列の、第 j 対角成分は

$(\alpha_j - \beta_j)(n - E/n - 1) + \beta_j$ である。A タイプのプレイヤーの1人を、 i とする。第 i 対

角成分は、 $-[(\alpha_i - \beta_i)(n - E - 1/n - 1) + \beta_i]$ である。ヤコビ行列のすべての対角成分が負であれば、この社会状態は漸近安定となる。プレイヤー j が同調タイプであるから、第 j 対角成分は負となりうる。プレイヤー i がA タイプであるから、第 i 対角成分は常に負である。よって、同調タイプの各プレイヤーに対応する成分が0で、残りの成分が1と

第3章

なる社会状態は、漸近安定となりうる。これは、 $(1,1,\dots,1)$ が、 α_i と β_i の大小に関わらず漸近安定となる、唯一の点となることと、矛盾する。

全プレイヤーが、Aタイプであるとき、社会状態 $(1,1,\dots,1)$ 以外の平衡点が存在し、 α_i と β_i の大小に関わらず漸近安定だとする。この平衡点には0の成分が必ず存在する。漸近安定性より、この平衡点の近傍では、0の成分に該当するプレイヤー*i*について $\dot{x}_{iA} < 0$ が成り立つ。一方で、仮定より各プレイヤーがAタイプであるから、全ての平衡点の近傍で、プレイヤー*i*について $\dot{x}_{iA} > 0$ となる。これは矛盾である。

社会状態 $(0,0,\dots,0)$ が唯一の漸近安定点であるための必要十分条件が2)であることを示す。社会状態 $(0,0,\dots,0)$ が唯一の漸近安定点であるのに、Aタイプか同調タイプのプレイヤーが存在したとする。Aタイプの場合、 $(0,0,\dots,0)$ の近傍において、このプレイヤーに該当する成分で $\dot{x}_{iA} > 0$ が成り立つ。これは $(0,0,\dots,0)$ が漸近安定でないことを意味し、矛盾である。同調タイプの場合、 α_i と β_i の大小によっては、他の点が漸近安定となりうるから矛盾する。同調タイプのプレイヤーの人数を、 E とする。同調タイプの各プレイヤーに対応する成分が1で、残りのBタイプの各プレイヤーに対応する成分が0となる、社会状態を考える。同調タイプのプレイヤーの1人を、 j とする。この社会状態のヤコビ行列の、第*j*対角成分は $-[(\alpha_j - \beta_j)(E - 1/n - 1) + \beta_j]$ である。Bタイプのプレイヤーの1人を、 i とする。第*i*対角成分は、 $(\alpha_i - \beta_i)(E/n - 1) + \beta_i$ である。ヤコビ行列のすべての対角成分が負であれば、この社会状態は漸近安定となる。プレイヤー*j*が同調タイプであるから、第*j*対角成分は負となりうる。プレイヤー*i*がBタイプであるから、第*i*対角成分は常に負である。よって、同調タイプの各プレイヤーに対応する成分が1で、残りの成分が0となる社会状態は、漸近安定となりうる。これは、 $(0,0,\dots,0)$ が、 α_i と β_i の大小に関わらず漸近安定となる、唯一の点となることと、矛盾する。

全プレイヤーが、Bタイプであるとき、社会状態 $(0,0,\dots,0)$ 以外の平衡点が存在し漸近安定だとする。この平衡点には1の成分が必ず存在する。漸近安定性より、この平衡点の近傍では、1の成分に該当するプレイヤー*i*について $\dot{x}_{iA} > 0$ が成り立つ。一方で、仮定より全プレイヤーがBタイプであるから、全ての平衡点の近傍で、プレイヤー*i*について $\dot{x}_{iA} < 0$ となる。これは矛盾である。

証明終わり

全平衡点の中で、一般的諸規則のみが各プレイヤーの α_i と β_i の大小に関わらず漸近安定であるときには、全プレイヤーが同じタイプでなければならない。このとき、一般的諸規則のうち1つのみが漸近安定である。

命題3：2つの一般的諸規則が同時に漸近安定となるための必要十分条件は、全プレイヤーが同調タイプであることである。

第3章

証明

命題1の証明より，全プレイヤーが同調タイプであるとき，2つの一般的諸規則は同時に漸近安定となる。

2つの一般的諸規則が同時に漸近安定であるときに，あるプレイヤー j が存在し，同調タイプでないとする。社会状態 $(0,0, \dots, 0)$ に対応するヤコビ行列の， j 行目の対角成分は β_j である。社会状態 $(1,1, \dots, 1)$ に対応するヤコビ行列の， j 行目の対角成分は $-\alpha_j$ である。これらの対角成分は，プレイヤー j が同調タイプではないから，同時には負とならない。よって，一般的諸規則の片方は漸近安定ではない。したがって，同調タイプでないプレイヤーの存在を仮定するのは誤りであり，全員が同調タイプである。

証明終わり

命題3より，2つの一般的諸規則が同時に漸近安定となるための必要十分条件は，全プレイヤーが同調タイプであることである。これが成り立つ場合には，2つの一般的諸規則が収束先の候補となる。

命題4：内点平衡点が存在するための必要十分条件は，全プレイヤーが同調タイプであることである。また，内点平衡点は漸近安定でない。

証明

プレイヤー i について，端点以外で平衡点が存在したとすれば，それは点 $\frac{\beta_i}{\beta_i - \alpha_i}$ のみで

ある。この点が内点となる必要十分条件は， $0 < \frac{\beta_i}{\beta_i - \alpha_i} < 1$ であるが，3タイプのプレイヤーのうち，これが成り立つのは同調タイプのみである。

漸近安定な内点が存在しないことを，ウェイブル(1999 : 219)に基づいて証明する。連立微分方程式は一般に，それと同様の変数を持つ正関数で除しても，解軌道が影響を受けず，移動速度のみが変わる。本モデルの連立微分方程式の各式を $\prod_{j=1}^n x_{jA}(1 - x_{jA})$ で除すことにより，新たな連立微分方程式を作る。すべての内点において，任意の j で $x_{jA}(1 - x_{jA}) > 0$ が成り立つから，この除算は正関数による除算である。除算後の新たな連立微分方程式は，各式で，右辺に左辺と同じ変数を含まない。よって，すべての内点において，ヤコビ行列の全対角成分は0となり，トレースは0となる。新たな連立微分方程式は連続で微分可能だから，ウェイブル(1999)の命題6. 6より，すべての内点は非漸近安定である。元の連立微分方程式の解軌道は，新たな連立微分方程式のそれと同じであるから，同様に，すべての内点が非漸近安定である。

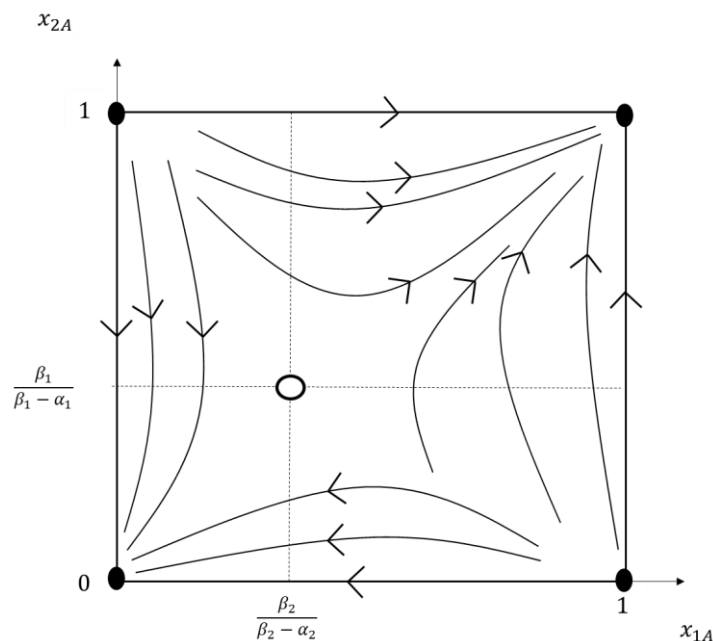
証明終わり

第3章

命題4より、内点平衡点は、全プレイヤーが同調タイプであれば存在するが、漸近安定ではなく、収束先の候補とはならない。社会状態が内点平衡点に一時的に留まる可能性はあるが、この点は微小な変動に対して安定ではない。内点平衡点が存在するときには、全プレイヤーが同調タイプであるから、命題3より、社会状態はどちらの一般的諸規則にも収束しうる。

4 考察

本節では、理神論的な一般的諸規則の形成過程を、本モデル上で再解釈を試みる。次に、道德感情の腐敗論に代表される、理神論と整合しない状況の再解釈を試みる。そして、以上の2つが混在する状況の再解釈を試みる。



図：2人ゲームにおいて内点平衡点が存在する場合

理神論的な一般的諸規則の形成過程においては、一般的諸規則が人々の相互作用によって形成され、厳守される。この状況は、ゲームが進行した後に、社会状態が一般的諸規則に、すなわち $(0,0, \dots, 0)$ か $(1,1, \dots, 1)$ に、収束した状態と解釈できる。よって、少なくとも1つの一般的諸規則が漸近安定でなければならない。これが満たされるためには、命題1あるいは命題3で述べた条件が満たされる必要がある。命題1の条件が満たされたときには、漸近安定な一般的諸規則はどちらか1つであるが、命題3の条件が満たされたときには両

第3章

方になる(図)。この点で2つの命題の条件は異なるが、一般的諸規則が漸近安定であることには変わりがない。命題1・命題3で述べた条件は、プレイヤー集合が、限定されたタイプから構成されることを要求する。これが成り立たない場合には、一般的諸規則は漸近安定にならない。しかし、これらの命題の条件が成り立っていても、一般的諸規則以外に漸近安定点が存在する可能性があり、社会状態は一般的諸規則以外に収束しうる。この可能性を排除し、一般的諸規則が確実に形成されるものとみなすならば、命題2の条件が必要である。プレイヤー集合は、Aタイプのみで構成されるか、Bタイプのみで構成されなければならない。

スミス自身が言及した、道德感情の腐敗のような、理神論と整合しない状況はどのように解釈されるだろうか。この状況においては、一般的諸規則は当然実現していない。この状況は、大きく3通りに解釈が可能である。1つ目は、一般的諸規則が漸近安定でない場合である。この場合に、一般的諸規則は収束先の候補とならないから、社会状態が他の点に収束していると考えられる。

2つ目は、一般的諸規則が漸近安定であるが、それ以外にも漸近安定点が存在する場合である。この場合には、一般的諸規則だけでなく他の平衡点も収束先の候補となるから、一般的諸規則とは別の点に社会状態が収束しうる。

3つ目は、ダイナミクスが未だに収束していない場合である。考えられる原因は、そもそも漸近安定点が存在しないこと、ダイナミクスの進行度合いが遅いこと、内点平衡点に社会状態が止まっていること、である。ダイナミクスの進行度合いが遅ければ、たとえ一般的諸規則が漸近安定であっても、そこに社会状態が到達していない可能性がある。ダイナミクスの進行度合いは、ゲームの繰り返し回数と、各利得表の値に依存する。また、内点平衡点が存在する場合には、社会状態がこの点に到達したまま止まる可能性がある(図)。命題4より、内点平衡点は漸近安定ではないが、仮に微小な変動が起こらなければ、社会状態はこの点に止まる。

『道德感情論』には、理神論的な一般的諸規則の形成過程についての記述が存在すると同時に、理神論と整合しない状況についての記述も存在する。それぞれについての、本モデルにおける再解釈を、上に提示したわけであるが、この相反する記述の混在は、如何にして整合的に解釈可能であろうか。1つの方法は、非理神論的状况を、一般的諸規則形成の途中の一時的な状況と捉える、ことである。現状は一時的に非理神論的状况にあるが、最終的には一般的諸規則が実現されると想定する。この想定は、社会状態が既に収束している場合には成り立たない。しかし、ダイナミクスの進行度合いが遅い場合、あるいは、内点平衡点に社会状態が止まっている場合(図)には、この想定が成り立つ。本解釈が成り立つとすれば、非理神論的状况の解決シナリオは、ゲーム回数の増加か、モデル外の要因による変動になる¹⁵。

¹⁵ このシナリオは、『道德感情論』の文脈において、如何ようにも解釈しうる。例えば、第6版の改訂箇所のみを考慮するとすれば、良心論の改訂(「称賛にあたひすること」等々)は、モデル外の要因に働きかけるための、スミスの策と解釈できるのではないか。

5 おわりに

本章は『道德感情論』における一般的諸規則の形成過程を、主体達が他者を繰り返し観察することによって進む、試行錯誤学習の過程とみなし、レプリケータダイナミクスを用いて定式化した。そして、このモデルを用いて、同書における理神論的な一般的諸規則についての記述、及び、道德感情の腐敗に代表される非理神論的な記述を、再解釈した。加えて、両者が混在する状況についての解釈を提示した。

本章が提示した混在状況についての解釈は、道德感情の腐敗に代表される非理神論的状况についての議論に、寄与する。道德感情の腐敗論は、同書の社会秩序形成論に矛盾すると考えられ、『道德感情論』第6版改訂の主要な原因であるとされてきた。しかし、本定式化によって生じた解釈からすれば、理神論的状况と非理神論的状况は矛盾しないとも、考えられる。非理神論的状况を、一般的諸規則形成の途中の、一時的な状況と捉えるならば、2つの状況は矛盾しない。この解釈は、動学による定式化を採用したゆえに生じており、本モデルの利点の1つと言える。

また、本章は、第1章で論じたセンの経済倫理学に対する含意を持つ。第1章で述べた通り、一般的諸規則は、自己目標選択に整合するコミットメントと基本的にみなされる。本章のモデルは、コミットメントの形成のモデルの1つと位置づけられる。センは、コミットメントの存在を主張する一方で、それが生じる過程については十分に説明しない。アイデンティティの感覚が生み出す規則が、コミットメントが生じる要因の1つとして挙げられているが、規則が生じる過程については明確な説明がない。本稿が第1章で行った批判は、一般的諸規則が生じる過程について十分な配慮がないために、成り立つ。規則が生じる過程についての説明が与えられれば、コミットメントの存在の説得力が増す。この説明の欠如は、第1章で述べた、コミットメントについての論争が起きる1つの原因でもあろう。この説明は、主流派経済モデルに代替する、現実妥当性の高いモデルを提示する意味でも、望ましいと言える。

第4章 『道徳感情論』における道徳感情の腐敗論の進化経済学的再解釈

1 はじめに

本章は、第3章のモデルを応用して、道徳感情の腐敗論の再解釈を行う。中立な観察者等の『道徳感情論』についての説明や、モデルについての基本的な説明は、前章以前と重複する部分に関して、基本的に省略する。なお、本章では、戦略Aと戦略Bの解釈の仕方を変更する。後述するように、本章では、戦略Aを徳の道に対応する戦略とみなし、戦略Bを財産の道に対応する戦略とみなす。この解釈の付加は、道徳感情の腐敗についての記述に基づいて行われる。前章では、2つの一般的諸規則は質的には区別されなかったが、それに対応する2つの社会状態は、この解釈の付加によって区別されることになる。本章は、道徳感情の腐敗が生じるメカニズムを、一般的諸規則の形成過程と整合的に明らかにする。

定式化の結果として、財タイプの存在は漸近安定性の腐敗度を増加させることが、プレイヤー集合に同調タイプが多いほど、腐敗度を深刻化させることが、明らかとなる。この結果は、同感という概念が道徳感情の腐敗の危険を孕むとする、先行研究の解釈を裏付ける (Brown 1994 : 36, 80-82, Griswold 1999 : 128)。

本章は以下のように構成される。第2節において、道徳感情の腐敗について述べる。第3節において、モデルを分析する。第4節において分析結果を考察し、最終節において本章総括する。

2 道徳感情の腐敗

本節で述べるべき内容は、第2章と重複する。よって、本節では、道徳感情の腐敗について、その要点を簡潔に述べる。

道徳感情の腐敗論は、『道徳感情論』第6版において追加された議論である。腐敗論の加筆は、スミスが第6版を出版した最大の動機とも言われている。

道徳感情の腐敗は、上位階級と、中位・下位階級との区別に基づいて論じられる。スミスによれば、「富裕な人びと、有力な人びとに感嘆し、ほとんど崇拜し、そして、貧乏でいやしい状態にある人びとを、軽蔑し、すくなくとも無視するという、この性向は、……道徳感情の腐敗の、大きな、そしてもっとも普遍的な、原因である」(TMS : I.iii.3.1)。

スミスは、徳の道 (the road to virtue) と財産の道 (that [the road] to fortune) という、2つの異なる倫理基準を区別する。徳の道に進むことは、「英知の研究と徳の実行」によって尊敬を得ようとすることを意味し、財産の道に進むことは「富と地位の獲得」によって尊敬を得ようとすることを意味する (TMS : I.iii.3.2)。財産の道は、徳の道とはまっ

第4章

たく整合しない、悪徳と愚行をしばしば伴う。財産の道へ走る人間が無視できないほどに増え、悪徳が蔓延る状況が、道徳感情が腐敗した状況である。

腐敗が生じるのは、2つの明確に異なる倫理基準が混同されてしまうことによる (TMS : I.iii.3.3)。中流及び下流の生活階級においては、両者はほとんど一致するが、上位の生活階級においては、両者は全く異なったものになる (TMS : I.iii.3.5-6)。上位の生活階級においては、「成功と昇進は、理解力があり豊富な知識をもった同等者たちの評価ではなく、無知高慢で誇りの高い上位者たちの、気まぐれでばかげた好意に依存する」 (TMS : I.iii.3.6)。上位階級においては、有徳な行動は軽んじられる。

この傾向は、上位階級に止まらず、中位・下位の階級にも波及する。このため、上位者における財産の道への偏重は、中位及び下位の階級においても進行する (TMS : I.iii.3.7)。上位の生活階級への憧れは、上位階級の服装を流行させるばかりか、悪徳もまた流行させる。上位階級に対する憧れは、人々に徳の道を軽んじさせ、財産の道へ走らせ、上位の生活階級に登り詰めるために努力させる。野心的な人間は、一度上位階級に上り詰めてしまえば、それに至る以前の悪徳は覆い隠されるだろうと考える。法律を超越する地位にたどり着いた人間は、過去の悪徳を隠蔽することができる。しかし、その試みは失敗に終わることが多い。また、仮に成功したとしてもその栄誉は汚れたものであり、彼自身からしても内心では自分の悪徳行為は恥ずべきものであって、自分自身を苦しめ続ける。

3 定式化

3.1 徳戦略と財戦略の区別、及び3種類のプレイヤー

本章冒頭に述べた通り、モデルについての基本的な説明は、前章以前と重複する部分に関して、基本的に省略する。

本節では、各戦略を前章とは異なる方法で解釈し、それに応じて、前章とは異なる意味を持つプレイヤーを導入する。利得表に3つの種類を設ける。

仮定1

プレイヤー*i*について、

$$\alpha_i > 0, \beta_i < 0。$$

仮定1は、マッチングされた2プレイヤーの戦略が一致した場合に、一致しない場合に比べて、利得が大きくなることを意味する。対戦相手と戦略が一致するということは、相手と感情を共有することを意味しており、共有しない場合に比べて喜びが増す。この仮定は、感情の共有によって一般的諸規則が形成されるとする、記述に対応する。

本章は、仮定1を満たすプレイヤーを同調タイプのプレイヤーであると定義する。このタイプのプレイヤーは、徳戦略（戦略A）に関して、他のプレイヤーがとる確率の平均が基準値 $(\frac{\beta_i}{\beta_i - \alpha_i})$ より低い場合には、自身の確率も下がり、他のプレイヤーのとる確率が

第4章

基準値より高い場合には、自身の確率も上がる。

道德感情の腐敗についての記述を考慮すると、必ずしも仮定1が成立するとはみなされない。ここで、戦略Aを徳の道に該当する戦略とし、戦略Bを財産の道に該当する戦略であると定義する。戦略Aを**徳戦略**、戦略Bを**財戦略**と呼ぶ。

道德感情の腐敗論においては、財産の道に進む主体は、徳の道を軽視する。この記述を利得表上で解釈するなら、 a_{AA}^i が a_{BA}^i に比べて、及び a_{AB}^i が a_{BB}^i に比べて、相対的に小さくなっている状況と解釈できる。この状況においては、主体が徳戦略を取った際の利得が、財戦略を取った際の利得に比べて、相対的に小さくなる。これは、徳戦略をとったときの感情共有の喜びが、相対的に小さくなることを、意味する。道德感情の腐敗論における、徳の道の軽視を仮定2によって表現する。

仮定2

プレイヤー*i*について、

$$\alpha_i < 0, \beta_i < 0。$$

仮定2を満たすプレイヤー*i*は、対戦相手の戦略がいずれの場合にも、財戦略のもたらす利得が、徳戦略のもたらす利得より大きくなる。仮定2を満たすプレイヤー*i*は、戦略の変化が相手プレイヤーの戦略に依存しない。プレイヤー*i*が仮定2を満たす場合、定義域内では、平衡点を除いて常に $\dot{x}_{iA} < 0$ が成り立つ。

仮定2を満たすプレイヤーを**財タイプ**のプレイヤーであると定義する。

また、『道德感情論』においては、財産の道へ進む主体のような人間だけが存在するわけではない。例えば、欺瞞論について述べる箇所であっても、有徳な人物の存在についての記述が見られる（TMS：VI.3.23ff.）。道德感情の腐敗論においても、徳の道に進む主体が存在しないとは記述されていない。このような有徳なプレイヤーが満たす条件を、仮定3とする。

仮定3

プレイヤー*i*について、

$$\alpha_i > 0, \beta_i > 0。$$

仮定3を満たすプレイヤー*i*は、対戦相手の戦略に関係なく、徳戦略のもたらす利得が、財戦略のもたらす利得より大きくなる。仮定3を満たすプレイヤー*i*は、戦略の変化が相手プレイヤー*i*の戦略に依存しない。定義域内では、平衡点を除いて常に $\dot{x}_{iA} > 0$ が成り立つ。

仮定3を満たすプレイヤーを**徳タイプ**のプレイヤーであると定義する。

3.2 各タイプ間の対戦

3タイプの組み合わせは7つに場合分けされ、以下に結果が示される。命題5から命題7の証明は、章末の数学補注に記載してある。

第4章

場合1：全員が同調タイプ

命題3より，社会状態 $(0,0,\dots,0)$ 及び社会状態 $(1,1,\dots,1)$ の2点が漸近安定となる。他の平衡点は，各プレイヤーの α_i と β_i の大小によって，漸近安定となる場合もあるし，ならない場合もある。このことは，命題2の証明中の，0と1が混在する平衡点についての議論から，示される（証明略）。

場合2・3：全員が財タイプ・全員が徳タイプ

命題2より，全員が財タイプの場合2では，社会状態 $(0,0,\dots,0)$ が唯一の漸近安定点となる。各プレイヤー i の x_{iA} は，平衡点を除いて，他プレイヤーの戦略に依存せずに常に減少する。全員が徳タイプの場合3では，命題2より，社会状態 $(1,1,\dots,1)$ が唯一の漸近安定点となる。各プレイヤー i の x_{iA} は，平衡点を除いて，他プレイヤーの戦略に依存せずに常に増加する。

場合4：同調タイプと財タイプ

財タイプのプレイヤーがいるので，社会状態 $(1,\dots,1)$ は明らかに漸近安定ではない。

命題5：プレイヤー集合が財タイプと同調タイプで構成されとする。社会状態 $(0,0,\dots,0)$ は漸近安定である。それ以外の平衡点は，各プレイヤーの α_i と β_i の大小によって，漸近安定となる場合もあるしならない場合もある。

場合5：同調タイプと徳タイプ

徳タイプのプレイヤーがいるので，社会状態 $(0,\dots,0)$ は明らかに漸近安定ではない。

命題6：プレイヤー集合が徳タイプと同調タイプで構成されとする。社会状態 $(1,1,\dots,1)$ は漸近安定である。それ以外の平衡点は，各プレイヤーの α_i と β_i の大小によって，漸近安定となる場合もあるしならない場合もある。

場合6：財タイプと徳タイプ

一般性を失わずに，プレイヤー1から p までが，財タイプであるとする。第1から，第 p 成分までが0，それ以降の成分が1となる社会状態が唯一の漸近安定点である。これは直感的に明らかであろう。財タイプの，プレイヤー i の x_{iA} は他プレイヤーの戦略に依存せずに減少する。また徳タイプの，プレイヤー i の x_{iA} は他プレイヤーの戦略に依存せずに増加する。

場合7：財タイプと徳タイプと同調タイプが混在する場合

命題7：プレイヤー集合が，財タイプと徳タイプと同調タイプで構成されとする。漸近安定点は，各プレイヤーの α_i と β_i の組み合わせに依存して変化し，特定の組み合わせにおいては漸近安定点が存在しない。

全てのタイプが混在する，最も一般的と言える状態においては，必ず漸近安定となる点は存在しないし，そもそも漸近安定点が存在しない場合もある。数学補注の末尾に，具体

第4章

例を示した。

4 考察

4.1 場合 1

場合 1 では、 $(0, \dots, 0)$ と $(1, \dots, 1)$ 以外の点は、各プレイヤーの α_i と β_i の大小に依存して、漸近安定性を持つかどうかが決まる。この意味で、これらの点は必ずしも漸近安定ではない。同調タイプの戦略は、対戦相手の戦略に依存して変化する。全員が同調タイプなのだから、社会状態は 2 つの正反対の点に収束しうる。1 つ目の社会状態 $(0, \dots, 0)$ は全員が財戦略をとる点であり、反対に、もう 1 つの社会状態 $(1, \dots, 1)$ は、全員が徳戦略をとる点である。

4.2 場合 4

場合 4 では、命題 5 より、 $(0, \dots, 0)$ 以外の平衡点は、各プレイヤーの α_i と β_i の大小に依存して漸近安定性を持つかどうかが決まる。同調タイプが 1 人でも徳戦略をとる平衡点は、必ずしも漸近安定とは言えない。この組み合わせにおいては、1 人でも財タイプのプレイヤーが存在すれば、全員が財戦略をとる $(0, 0, \dots, 0)$ が必ず漸近安定となる。

4.3 場合 5

場合 4 における財タイプが、徳タイプに変更されている。その結果は、財タイプを徳タイプに置き換えれば、場合 4 と同様である。場合 5 では、命題 6 より、 $(1, \dots, 1)$ 以外の平衡点は、各プレイヤーの α_i と β_i の大小に依存して漸近安定性を持つかどうかが決まる。同調タイプが 1 人でも財戦略をとる平衡点は、必ずしも漸近安定とは言えない。

この組み合わせにおいては、1 人でも徳タイプのプレイヤーが存在すれば、全員が徳戦略をとる $(1, \dots, 1)$ が、必ず漸近安定になる。

4.4 場合 7

場合 7 は、全タイプが存在するという意味で、最も一般的な場合である。場合 7 においては、各プレイヤーの α_i と β_i の大小に依存せず漸近安定となる点は、存在しない。また、各プレイヤーの利得が特定の条件を満たす場合には、漸近安定点が存在しない場合がある。どの社会状態も必ずしも漸近安定とならないのは、同調タイプのプレイヤーが、財タイプから影響を受けるのと同時に、徳タイプからも影響を受けるからである。場合 4・場合 5 においては、同調タイプが片方のタイプのみから影響を受ける状況であったので、必ず漸

第4章

近安定となる点が存在した。しかし、場合7においては、財・徳の2タイプのプレイヤーが存在するので、同調タイプは両者から影響を受ける。そのため、場合4・場合5とは異なり、各プレイヤーの α_i と β_i の大小によらず漸近安定となる点は存在しない。したがって、ゲームが繰り返された後に、社会状態がどの点に収束するかは不確かである。また、 $(0, \dots, 0)$ と $(1, \dots, 1)$ のいずれもが漸近安定とはならず、収束先において、各人の判断が一致することはない。

4.5 財産の道と道德感情の腐敗

スミスは、財産の道へ走る人間の存在が、道德感情の腐敗の原因であるとした。本モデルはそのような人間を、財タイプのプレイヤーとして導入した。財タイプのプレイヤーの存在は、どのような効果をもたらすであろうか。これを論じるにあたり、平衡点についての、財戦略の採用数を基準とした区別を導入する。平衡点の中でも、0の成分が多いほど、道德感情の腐敗の程度が高いとみなす。これを腐敗度と呼ぶ。腐敗度が最も高いのは、 $(0, \dots, 0)$ であり、最も低いのは $(1, \dots, 1)$ である。

財タイプの存在によって、存在しない場合に比べて腐敗度の高い社会状態が、収束先の候補になる。財タイプが存在しない状況に、新たに財タイプが加わったときの影響を考察する。場合3から場合6への変化を想定したときには、漸近安定点の腐敗度の増加は、財タイプが増えた人数分となる。増えた人数が少なければ、漸近安定点の腐敗度の変化は少ない。

しかし、場合1から場合4への変化を想定した場合は、漸近安定点の腐敗度の変化は顕著である。場合1では、 $(0, \dots, 0)$ と $(1, \dots, 1)$ のいずれもが漸近安定であり、他の平衡点が漸近安定でもありうる。場合1の状況から、新たに1人でも財タイプが加わると、場合4へと状況が変わる。場合4では、 $(1, \dots, 1)$ が漸近安定ではなくなり、各プレイヤーの α_i と β_i の大小によらず漸近安定性が保障される点は、最も腐敗度の高い $(0, \dots, 0)$ のみになる。

場合5から場合7への変化を想定する。場合5においては、腐敗度の最も低い $(1, \dots, 1)$ は、各プレイヤーの α_i と β_i の大小によらず漸近安定であった。しかし、変化後にはそれが成り立たなくなる。場合7への変化が生じるには、財タイプのプレイヤーが1人増えるだけで十分である。

以上のように、財タイプの存在は漸近安定点の腐敗度を増加させるのであり、同調タイプが存在する2つの場合（場合1・場合5）で、人数分以上に腐敗度を高める。場合1と場合5を比べると、場合1の方が腐敗度の増加は深刻である。場合1から場合4への変化では、各プレイヤーの α_i と β_i の大小によらず漸近安定となる点が、最も腐敗度の高い $(0, \dots, 0)$ のみとなる。場合5から場合7への変化では、このようなことは生じない。

財タイプのプレイヤーの存在は、プレイヤー集合に同調タイプが多いほど、腐敗度を深刻化させると言える。

5 おわりに

本章は、『道徳感情論』第1部における道徳感情の腐敗論を、戦略の解釈を前章から変更したモデルを用いて再解釈した。本章のモデルは、前章のモデルの1つの応用例として位置付けられる。定式化の結果として、財タイプの存在は漸近安定性の腐敗度を増加させるのであり、プレイヤー集合に同調タイプが多いほど、腐敗度を深刻化させることが、明らかとなった。

この結果は、同感という概念が道徳感情の腐敗の危険を孕むとする解釈と、整合する(Brown 1994: 36, 80-82, Griswold 1999: 128[第2章5節で引用])。本モデルの結果は、この解釈の1つの裏付けとなる。同調タイプは、対戦相手と戦略が一致した場合に、しない場合に比べて利得が大きくなる。この意味で、同調タイプは、同感という概念にまさに整合する性質を持つ。プレイヤー集合に同調タイプが多いほど腐敗度は深刻化するが、このことは、同感という概念が道徳感情の腐敗の危険を孕むことを意味する。本章は以上の結果を、一般的諸規則の形成に整合的に、道徳感情の腐敗を定式化することで得た。先行研究における解釈を、数理的手法によって裏付けたことが、本章の貢献である。

数学補注

n プレイヤーゲームにおける、連立微分方程式のヤコビ行列は、 i 行目の対角成分において、

$$\frac{\partial \dot{x}_{iA}}{\partial x_{iA}} = \left((\alpha_i - \beta_i) \left(\sum_{j \neq i} x_{jA} / (n-1) \right) + \beta_i \right) (1 - 2x_{iA}).$$

また、ヤコビ行列は非対角成分 $j \neq i$ において、

$$\frac{\partial \dot{x}_{iA}}{\partial x_{jA}} = \frac{\alpha_i - \beta_i}{n-1} x_{iA} (1 - x_{iA}),$$

となる。よって、平衡点においては非対角成分が0となる。ある平衡点が漸近安定となる必要十分条件は、ヤコビ行列が安定となることである。全ての非対角成分が0となるので、ヤコビ行列が安定となる必要十分条件は、全ての対角成分が負となることである。

命題5

命題5：プレイヤー集合が財タイプと同調タイプで構成されとする。社会状態 $(0,0,\dots,0)$ は漸近安定である。それ以外の平衡点は、各プレイヤーの α_i と β_i の大小によって、漸近安定となる場合もあるしならない場合もある。

証明

一般性を失わずに、プレイヤー1から p 人が財タイプであり、残りのプレイヤーは同調タイプであるとする。社会状態 $(0,0,\dots,0)$ において、連立微分方程式を線形近似すると、

$$\begin{pmatrix} \dot{x}_{1A} \\ \vdots \\ \dot{x}_{pA} \\ \dot{x}_{p+1A} \\ \vdots \\ \dot{x}_{nA} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \beta_1 & 0 & \cdots & 0 & & \\ 0 & \beta_2 & & \vdots & & 0 \\ \vdots & & \ddots & 0 & & \\ 0 & \cdots & 0 & \beta_p & & \\ & & & \beta_{p+1} & 0 & \cdots & 0 \\ & & & 0 & \beta_{p+2} & & \vdots \\ & & & \vdots & & \ddots & 0 \\ 0 & & & 0 & \cdots & 0 & \beta_n \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_{1A} \\ \vdots \\ x_{pA} \\ x_{p+1A} \\ \vdots \\ x_{nA} \end{pmatrix}$$

となる。ヤコビ行列は対角成分以外が全て0である。対角成分は、第*i*行で β_i となる。仮定1と仮定2より、ヤコビ行列の対角成分は全て負である。よって、ヤコビ行列は安定な行列となり、社会状態 $(0,0,\dots,0)$ は漸近安定である（なお、社会状態 $(0,0,\dots,0)$ が漸近安定であることは、命題1の2）が成り立つことからわかる）。

次に、 $(0,0,\dots,0)$ 以外の平衡点の漸近安定性を判定する。

i 財タイプの*p*人に該当する成分

第*p*成分以前に、1が1つでも含まれる平衡点は漸近安定ではない。財タイプのプレイヤー*i*については、他のプレイヤーの戦略に依存せず、平衡点を除いて常に $\dot{x}_{iA} < 0$ が成り立つ。

ii 同調タイプに該当する成分

ヤコビ行列の対角成分は、 $((\alpha_i - \beta_i)(\sum_{j \neq i} x_{jA}/n - 1) + \beta_i)(1 - 2x_{iA})$ である。このプレイヤーに該当する成分に0を割り当てた時、連立微分方程式を線形近似した際の、ヤコビ行列の対角成分は $((\alpha_i - \beta_i)(\sum_{j \neq i} x_{jA}/n - 1) + \beta_i)$ である。 $\sum_{j \neq i} x_{jA} = 0$ とすると、 $(0,0,\dots,0)$ の漸近安定性を検討することになるから、 $1 \leq \sum_{j \neq i} x_{jA} \leq n - p - 1$ 。仮定1より、対角成分は、各プレイヤーの α_i と β_i の大小によっては、負にならない。

このプレイヤーに該当する成分に1を割り当てた時、連立微分方程式を線形近似した際の、対角成分は $-(\alpha_i - \beta_i)(\sum_{j \neq i} x_{jA}/n - 1) + \beta_i$ である。 $0 \leq \sum_{j \neq i} x_{jA} \leq n - p - 1$ と仮定1より、対角成分は、各プレイヤーの α_i と β_i の大小によっては、負にならない。

証明終わり

命題6

命題6：プレイヤー集合が徳タイプと同調タイプで構成されとする。社会状態 $(1,1,\dots,1)$ は漸近安定である。それ以外の平衡点は、各プレイヤーの α_i と β_i の大小によって、漸近安定となる場合もあるしならない場合もある。

証明

一般性を失わずに、プレイヤー1から*q*人が徳タイプであり、残りのプレイヤーは同調タイプであるとする。命題5と同様に、社会状態 $(1,1,\dots,1)$ において、連立微分方程式を線形近似する。ヤコビ行列は、非対角成分が全て0であり、対角成分は第*i*行で α_i となる。仮定1と仮定3よりヤコビ行列の対角成分は全て負である。よって、ヤコビ行列は安定な行列となり、 $(1,1,\dots,1)$ は漸近安定である（なお、社会状態 $(1,1,\dots,1)$ が漸近安定であることは、

第4章

命題1の1)が成り立つことからわかる)。

次に、 $(1,1,\dots,1)$ 以外の平衡点の漸近安定性を検討する。

i 徳タイプの q 人に該当する成分

第 q 成分までに0が含まれる平衡点は、タイプのプレイヤー i については、仮定3より、他のプレイヤーの戦略に依存せず、平衡点を除いて常に $\dot{x}_{iA} > 0$ が成り立つから、明らかに漸近安定ではない。よって、第 q 成分までが1になる点のみが漸近安定である。

ii 同調タイプに該当する成分

ヤコビ行列の対角成分は、 $\left((\alpha_i - \beta_i)(\sum_{j \neq i} x_{jA}/n - 1) + \beta_i\right)(1 - 2x_{iA})$ である。このプレイヤーに該当する成分に1を割り当てた時、連立微分方程式を線形近似した際の、ヤコビ行列の対角成分は $-\left((\alpha_i - \beta_i)(\sum_{j \neq i} x_{jA}/n - 1) + \beta_i\right)$ である。 $\sum_{j \neq i} x_{jA} = n - 1$ とすると、 $(1,1,\dots,1)$ の漸近安定性を検討することになるから、 $q \leq \sum_{j \neq i} x_{jA} \leq n - 2$ 。仮定1より、対角成分は、各プレイヤーの α_i と β_i の大小によっては、負にならない。

このプレイヤーに該当する成分に0を割り当てた時、連立微分方程式を線形近似した際の、ヤコビ行列の対角成分は $\left((\alpha_i - \beta_i)(\sum_{j \neq i} x_{jA}/n - 1) + \beta_i\right)$ である。 $q \leq \sum_{j \neq i} x_{jA} \leq n - 1$ と仮定1より、対角成分は、各プレイヤーの α_i と β_i の大小によっては、負にならない。

証明終わり

命題7

命題7：プレイヤー集合が、財タイプと徳タイプと同調タイプで構成されとする。漸近安定点は、各プレイヤーの α_i と β_i の組み合わせに依存して変化し、特定の組み合わせにおいては漸近安定点が存在しない。

証明

一般性を失わずに、プレイヤー1から p 人が財タイプ、プレイヤー $p+1$ 以降の q 人が徳タイプ、残りが同調タイプであるとする。

i 財タイプの p 人に該当する成分

第 p 成分までに1が含まれる平衡点は、財タイプのプレイヤー i については、仮定2より、他のプレイヤーの戦略に依存せず、平衡点を除いて常に $\dot{x}_{iA} < 0$ が成り立つから、明らかに漸近安定ではない。

ii 徳タイプの q 人に該当する成分

また、第 q 成分までに0が含まれる平衡点は、徳タイプのプレイヤー i については、仮定3より、他のプレイヤーの戦略に依存せず、平衡点を除いて常に $\dot{x}_{iA} > 0$ が成り立つから、明らかに漸近安定ではない。

iii 同調タイプに該当する成分

ヤコビ行列の対角成分は、 $\left((\alpha_i - \beta_i)(\sum_{j \neq i} x_{jA}/n - 1) + \beta_i\right)(1 - 2x_{iA})$ である。このプレイヤーに該当する成分に1を割り当てた時、連立微分方程式を線形近似した際の、ヤコビ行

第4章

列の対角成分は $-(\alpha_i - \beta_i)(\sum_{j \neq i} x_{jA}/n - 1) + \beta_i$ である。 $q \leq \sum_{j \neq i} x_{jA} \leq n - 2$ と仮定1より、対角成分は、各プレイヤーの α_i と β_i の大小によっては、負にならない。

このプレイヤーに該当する成分に0を割り当てた時、連立微分方程式を線形近似した際の、ヤコビ行列の対角成分は $(\alpha_i - \beta_i)(\sum_{j \neq i} x_{jA}/n - 1) + \beta_i$ である。 $q \leq \sum_{j \neq i} x_{jA} \leq n - 2$ と仮定1より、対角成分は、各プレイヤーの α_i と β_i の大小によっては、負にならない。

以上 i, ii, iii より、各平衡点の漸近安定性の有無は、各プレイヤーの α_i と β_i の大小に依存して変化する。

次に、漸近安定点が存在しない場合の存在を示す。以下では、漸近安定点を求めることを試み、ある利得の組み合わせの下では、その試みが必ず失敗に終わることを示す。

任意の p と q が与えられたとする。i, ii の議論から、漸近安定点においては、 p 人に該当する成分に0が割り当てられ、 q 人に該当する成分には1が割り当てられる。

連立微分方程式を線形近似した際の、ヤコビ行列の対角成分を考える。1人を除く、同調タイプのプレイヤー達に該当する対角成分を検討する（同調タイプが1人だけの場合には、次の段落のステップへと進む）。これらのプレイヤーの成分に0を割り当てると、対角成分、 $(\alpha_i - \beta_i)(\sum_{j \neq i} x_{jA}/n - 1) + \beta_i$ が正になる場合が生じうる。 $\frac{q}{n-1} > \frac{\beta_i}{\beta_i - \alpha_i}$ のときにこの

対角成分は正となるが、仮定1より、任意の q でこれを満たす α_i と β_i の組み合わせが存在する。反対に、これらのプレイヤーの成分に1を割り当てると、対角成分が負になる。よって、1人を除く同調タイプのプレイヤーの成分に、1を割り当てる他ない。

残り1人のプレイヤーの成分に、0と1のどちらを割り当てべきか検討する。いずれを割り当てても、ヤコビ行列の対角成分が0となってしまう場合がある。仮定1と中間値の定理より、 n を所与として任意の α_i と β_i に対して、 $(\alpha_i - \beta_i)(\sum_{j \neq i} x_{jA}/n - 1) + \beta_i = 0$ となるような、 $\sum_{j \neq i} x_{jA}$ が存在する。この場合には、0と1のどちらを割り当てても、ヤコビ行列の成分は0となる。他のプレイヤーへの割り当ては決定済みなので、残り1人のプレイヤーにとっての $\sum_{j \neq i} x_{jA}$ は決定済みであるが、これがちょうど中間値の定理を満たす場合がある。このとき、残り1人のプレイヤーに対応する、ヤコビ行列の対角成分は0となる。よって、漸近安定点は存在しない。

証明終わり

例： $n = 4, p = 1, q = 1$ としたときの、命題7

財タイプのプレイヤーに該当する成分が0、徳タイプのプレイヤーに該当する成分が1となる社会状態以外は、漸近安定にならない。漸近安定点を求めるにおいて、残り2人の同調タイプのプレイヤーに該当する成分を0とするか1にするべきかは、各人の $k_i \equiv \frac{\beta_i}{\beta_i - \alpha_i}$ に依存する。同調タイプなので仮定1より、両プレイヤーで $0 < k_i < 1$ が成り立つ。

$k_3 < 2/3$ かつ $k_4 < 2/3$ のとき、 $(0,1,1,1)$ が漸近安定となる。

$k_3 > 1/3$ かつ $k_4 > 1/3$ のとき、 $(0,1,0,0)$ が漸近安定となる。

$k_3 < 1/3$ かつ $k_4 > 2/3$ のとき、 $(0,1,1,0)$ が漸近安定となる。

第4章

$k_3 > 2/3$ かつ $k_4 < 1/3$ のとき, $(0,1,0,1)$ が漸近安定となる。

$k_3 \leq 1/3$ かつ $k_4 = 2/3$ のとき, $k_3 = 1/3$ かつ $k_4 \geq 2/3$ のとき, $k_3 = 2/3$ かつ $k_4 \leq 1/3$ のとき, $k_3 \geq 2/3$ かつ $k_4 = 1/3$ のときには, 漸近安定点は存在しない。全定義域にわたって漸近安定となる, 点が存在しない。このことから, 命題7の通り, 各プレイヤーの α_i と β_i の大小に依存して漸近安定点に変化することが, わかる。

終章

本稿はまず、アマルティア・センの『道徳感情論』解釈を考察の対象とした。第1章において、コミットメントと良俗の一般的諸規則（以下、一般的諸規則）についての、センの解釈を再検討した。センの見解とは異なり、自己目標選択を侵害するコミットメントは、一般的諸規則とは基本的に整合しない。第1章の議論は、自己目標選択を侵害するコミットメントの有無についての論争に、寄与する。この種のコミットメントに一般的諸規則が密接に関連すると、センが述べたことは、この種のコミットメントが存在しないことを意味しかねない。一般的諸規則は自己目標選択を侵害しないから、これと密接に関連するコミットメントも、自己目標選択を侵害しないと考えられる。

第2章において、中立的な観察者が持つ中立性についての、センの解釈を補足した。第2章における議論により、センの『道徳感情論』解釈をより深く理解することが可能となった。また、中立的な観察者の判断は一般的諸規則と整合するから、本章の考察は、一般的諸規則の考察ともみなしうる。この意味で第2章は、第1章・第3章における一般的諸規則についての議論を、補足した。また、第2章は、開いた中立性についてのセンの議論から一步進み、政治哲学における中立的な観察者の有効性について論じた。

第3章において、一般的諸規則の形成過程を、進化ゲームモデルで定式化し再解釈した。本章が提示した混在状況についての解釈は、道徳感情の腐敗に代表される非理神論的状况についての議論に、寄与する。道徳感情の腐敗論は、同書の社会秩序形成論に矛盾すると考えられてきた。しかし、本定式化によって生じた解釈からすれば、理神論的状况と非理神論的状况は矛盾しないとも、考えられる。非理神論的状况を、一般的諸規則形成の途中の、一時的な状況と捉えるならば、2つの状況は矛盾しない。この解釈は、進化経済学的な動学的定式化によって生じており、本モデルの利点と言える。また、本章は、第1章で論じたセンの経済倫理学に対する含意を持つ。第1章で述べた通り、一般的諸規則は、自己目標選択に整合するコミットメントと基本的にみなされる。本章のモデルは、コミットメントの形成のモデルの、1つと位置づけられる。センは、コミットメントの存在を主張する一方で、それが生じる過程については十分に説明しない。規則が生じる過程についての説明が与えられれば、コミットメントが存在するとする、主張の説得力が増す。この説明の欠如は、第1章で述べた、コミットメントについての論争が起きる1つの原因でもあろう。この説明は、主流派経済モデルに代替する、現実妥当性の高いモデルを提示する意味でも、望ましいと言える。

第4章においては、前章のモデルを応用して道徳感情の腐敗を再解釈した。定式化の結果として、同感という概念が道徳感情の腐敗の危険を孕むとする、先行研究の解釈を裏付けた。同調タイプは、対戦相手と戦略が一致した場合に、しない場合に比べて利得が大きくなる。この意味で、同調タイプは、同感という概念にまさに整合する性質を持つ。プレイヤー集合に同調タイプが多いほど腐敗の効果は深刻化するが、このことは、同感という概念が道徳感情の腐敗の危険を孕むことを意味する。本章は以上の結果を、一般的諸規則の形成に整合的に、道徳感情の腐敗を定式化することで得た。先行研究における解釈を、数理的手法によって裏付けたことが、本章の貢献である。

以上が本稿の成果である。しかし、本稿における各議論は完結されたわけではない。

コミットメント以外に関しても、センの経済倫理学は『道徳感情論』と深い関わりを持つ。本稿前半でその一端を述べた通り、セン自身がスミスの道徳哲学を高く評価し、自身の経済倫理学の内に取り入れている。典型的な例が、センの定義する「共感」(sympathy)という概念であり、これはスミスの同感とは異なる。センの文脈において、『道徳感情論』を再解釈することは、本稿が示したように、センの経済倫理学の研究に寄与する可能性を持つし、反対方向の寄与の可能性もある。また、人間の道徳的行動を記述するうえで、センとスミスの説明を比較したときに、どちらがより妥当なのかという問題も残る。本稿の議論の限りでは、コミットメントが生じるメカニズムを説明できる点で、スミスの説明が優れていると言える。しかし、これ以外の事柄に関しては、本稿は何も述べられない。

また、第3章における進化ゲームモデルには改良の余地がある。このモデルは基本的に、良俗の一般的諸規則の形成過程についての記述を忠実に定式化したものであって、その他の箇所での記述が十分には考慮されていない。このこともあって、モデル自体は、通常のレプリケータダイナミクスの域を出ない。『道徳感情論』中の他の箇所にも、良俗の一般的諸規則と同様に、スミス研究で重要視される概念についての記述が存在する。それらの記述を考慮に入れ、モデルに導入することが望ましいと思われる。また、いくつかの先行研究においては『道徳感情論』中の記述が、現代経済学概念によって既に再解釈されており、そのような記述はモデルへの導入が困難ではないだろう。行動経済学のモデルと整合する記述が指摘されているほか (Ashraf *et al.* 2005)、効用関数を用いた同書における主体の行動の定式化も存在する (Bréban 2012)。

今述べたような問題意識に基づき、第4章におけるモデルでは、道徳感情の腐敗についての記述を考慮に入れ、モデルに導入した。本稿はこの導入に一定の意義があることを主張する。とはいえ、この導入は、戦略についての解釈を変更する形で行われており、モデルの構造自体は第3章のモデルと同一で、2つのモデルの差異は小さい。

参考文献

英文

- Ashraf, N., Camerer, C. F., & Loewenstein, G. (2005). Adam Smith, behavioral economist. *Journal of Economic Perspectives*, 19(3), 131-145.
- Baier, K. (1977). Rationality and morality. *Erkenntnis*, 11(1), 197-223.
- Bandura, A. (1977). *Social learning theory*. Prentice Hall.
- Bréban, L. (2012). Sensitivity to prosperity and adversity: What would a Smithian function of happiness look like?. *The European Journal of the History of Economic Thought*, 19(4), 551-586.
- Bréban, L. (2014). Smith on happiness: towards a gravitational theory. *The European Journal of the History of Economic Thought*, 21(3), 359-391.
- Brennan, T. (1989). A Methodological Assessment of Multiple Utility Frameworks. *Economics and Philosophy*, 5(2), 189-208.
- Brennan, T. (1993). The Futility of Multiple Utility. *Economics and Philosophy*, 9(1), 155-164.
- Brown, V. (1994). *Adam Smith's discourse: canonicity, commerce and conscience*. Routledge.
- Buchan, B., & Hill, L. (2014). *An intellectual history of political corruption*. Basingstoke:Palgrave Macmillan.
- Cairns, J. W. (1993). Adam Smith's lectures on jurisprudence: Their influence on legal education. In *Adam Smith: International Perspectives* (pp. 63-83). Palgrave Macmillan, London.
- Campbell, T. (1971). *Adam Smith's Science of Morals*. London: Allen and Unwin.
- Corfe, R. (2007). *Deism and Social Ethics: The Role of Religion in the Third Millennium*. Arena books.
- Cudd, A. E. (2014). Commitment as motivation: Amartya Sen's theory of agency and the explanation of behaviour. *Economics and Philosophy*, 30(1), 35-56.
- de Jonge, J. P. (2005). Rational choice theory and moral action. *Socio-Economic Review*, 3(1), 117-132.
- Den Uyl, D. J. (2016). Impartial spectating and the price analogy. *Econ Journal Watch*, 13(2), 264-273.
- Dickey, L. (1986). Historicizing the "Adam Smith Problem": Conceptual, historiographical, and textual issues. *The Journal of Modern History*, 58(3), 580-609.
- Durlauf, S. N., & Young, H. P. (2001). The new social economics. In Durlauf, S. N., & Young, H. P. (Eds.). (2001). *Social dynamics*. Mit Press, 1-14.
- Dwyer, J. (2005). Ethics and Economics: Bridging Adam Smith's Theory of Moral

Sentiments and Wealth of Nations. *Journal of British Studies*, 44(4), 662-687.

- Engelen, B. (2017). A new definition of and role for preferences in positive economics. *Journal of Economic Methodology*, 24(3), 254-273.
- Erev, I., & Roth, A. E. (1998). Predicting how people play games: Reinforcement learning in experimental games with unique, mixed strategy equilibria. *The American economic review*, 88(4), 848-881.
- Etzioni, A. (1986). The case for a multiple-utility conception. *Economics and Philosophy*, 2(2), 159-184.
- Evensky, J. (1989). The evolution of Adam Smith's views on political economy. *History of political economy*, 21(1), 123-145.
- Evensky, J. (1998). Adam Smith's moral philosophy: The role of religion and its relationship to philosophy and ethics in the evolution of society. *History of Political Economy*, 30, 17-42.
- Fleischacker, S. (2004). *On Adam Smith's "Wealth of Nations": A Philosophical Companion*. Princeton University Press.
- Fleischacker, S. (2011). Adam Smith and cultural relativism. *Erasmus Journal for Philosophy and Economics*, 4(2), 20-41.
- Forman-Barzilai, F. (2010). *Adam Smith and the circles of sympathy: cosmopolitanism and moral theory*, Cambridge University Press.
- Frankfurt, H. G. (1971). Freedom of the Will and the Concept of a Person. *The Journal of Philosophy*, 68(1), 5-20.
- George, D. (1984). Meta-Preferences: Reconsidering Contemporary Notions of Free Choice. *International Journal of Social Economics*, 11(3), 92-107.
- Golemboski, D. (2018). The impartiality of Smith's spectator: The problem of parochialism and the possibility of social critique. *European Journal of Political Theory*, 17(2), 174-193.
- Griswold Jr, C. L. (1999). *Adam Smith and the virtues of enlightenment*. Cambridge University Press.
- Hanisch, C. (2013). Negative Goals and Identity: Revisiting Sen's Critique of Homo Economicus. *Rationality, Markets and Morals*, 4(75), 157-172.
- Hanley, R. P. (2009). *Adam Smith and the character of virtue*. Cambridge University Press.
- Harrison, P. (1990). *'Religion' and the Religions in the English Enlightenment*. Cambridge University Press.
- Harrison, P. (2011). Adam Smith and the history of the invisible hand. *Journal of the History of Ideas*, 72(1), 29-49.
- Harsanyi, J. C. (1955). Cardinal welfare, individualistic ethics, and interpersonal comparisons of utility. *Journal of political economy*, 63(4), 309-321.
- Hausman, D. M. (2005). Sympathy, commitment, and preference. *Economics and Philosophy*, 21(1), 33-50.

- Hefelbower, S. G. (1920). Deism Historically Defined. *The American Journal of Theology*, 24(2), 217-223.
- Henrich, J., Boyd, R., Bowles, S., Camerer, C., Fehr, E., Gintis, H., ... & Henrich, N. S. (2005). "Economic man" in cross-cultural perspective: Behavioral experiments in 15 small-scale societies. *Behavioral and brain sciences*, 28(6), 795-815.
- Hill, L. (2001). The Hidden Theology of Adam Smith. *European Journal of the History of Economic Thought*, 8(1), 1-29.
- Hill, L. (2006). Adam Smith and the theme of corruption. *The Review of Politics*, 68(4), 636-662.
- Hirschman, A. O. (1984). Against parsimony: Three easy ways of complicating some categories of economic discourse. *Bulletin of the American Academy of Arts and Sciences*, 37(8), 11-28.
- Kennedy, G. (2011). The hidden Adam Smith in his alleged theology. *Journal of the History of Economic Thought*, 33(3), 385-402.
- Kennedy, G. (2015). Adam Smith's Use of the 'Gravitation' Metaphor. *Economic Thought*, 4(1), 67-79.
- Khalil, E. L. (2013). What Determines the Boundary of Civil Society?. *Theoria*, 60(134), 26-49.
- Khalil, E. L. (2017). Socialized view of man vs. rational choice theory: What does smith's sympathy have to say?. *Journal of Economic Behavior & Organization*, 143, 223-240.
- Kiesling, L. L. (2012). Mirror neuron research and Adam Smith's concept of sympathy: Three points of correspondence. *The Review of Austrian Economics*, 25(4), 299-313.
- Konow, J. (2012). Adam Smith and the modern science of ethics. *Economics and Philosophy*, 28(3), 333-362.
- Kristol, I. (1980). Rationalism in economics. *The Public Interest*, 61, 201-18.
- Lindgren, J.R (1973). *The Social Philosophy of Adam Smith*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Lutz, M. A. (1993). The Utility of Multiple Utility: A Comment on Brennan. *Economics and Philosophy*, 9(1), 145-154.
- Meardon, S. J., & Ortmann, A. (1996). SELF-COMMAND IN ADAM SMITH'S THEORY OF MORAL SENTIMENTS A GAME-THEORETIC REINTERPRETATION. *Rationality and Society*, 8(1), 57-80.
- Minowitz, P. (1993). *Profits, Priests, and Princes: Adam Smith's Emancipation of Economics from Politics and Religion*. Stanford University Press.
- Morris, G. S. (1883). *Philosophy and Christianity*, Robert Carter & Brothers.
- Oslington, P. (2012). God and the market: Adam Smith's invisible hand. *Journal of Business Ethics*, 108(4), 429-438.
- Paganelli, M. P. (2015). Recent engagements with Adam Smith and the Scottish

enlightenment. *History of Political Economy*, 47(3), 363-394.

- Peach, T. (2014). Adam Smith's "Optimistic Deism," the Invisible Hand of Providence, and the Unhappiness of Nations. *History of Political Economy*, 46(1), 55-83.
- Peacock, M. (2013). Commitment and Goals. *Rationality, Markets and Morals*, 4(80), 221-226.
- Pettit, P. (2005). Construing Sen on Commitment. *Economics and Philosophy*, 21(1), 15-32.
- Rasmussen, D. C. (2014). *The pragmatic enlightenment*. Cambridge University Press.
- Raphael, D. D. (2007). *The impartial spectator: Adam Smith's moral philosophy*. Oxford University Press. 生越利昭・松本哲人訳(2009)『アダム・スミスの道徳哲学』昭和堂。
- Remow, G. (2007). General rules in the moral theories of Smith and Hume. *Journal of Scottish Philosophy*, 5(2), 119-134.
- Rosenthal, T. L., & Zimmerman, B. J. (2014). *Social learning and cognition*. Academic Press.
- Roth, A. E., & Erev, I. (1995). Learning in extensive-form games: Experimental data and simple dynamic models in the intermediate term. *Games and economic behavior*, 8(1), 164-212.
- Schelling, T. C. (1984). Self-command in practice, in policy, and in a theory of rational choice. *The American Economic Review*, 74(2), 1-11.
- Sen, A. (1977). Rational fools: A critique of the behavioral foundations of economic theory. *Philosophy & Public Affairs*, 6(4), 317-344. 大庭健・川本隆史訳(1989)『合理的な愚か者』(120-167) 勁草書房。
- Sen, A. (1985). Goals, Commitment, and Identity. *Journal of Law, Economics and Organization*, 1(2), 341-55. 若松良樹・須賀晃一・後藤玲子監訳(2014)『合理性と自由 (上)』(第5章) 勁草書房。
- Sen, A. (1997). *Choice, welfare, and measurement*. Harvard University Press. 大庭健・川本隆史訳(1989)「選択・順序・道徳性」『合理的な愚か者』(15-35) 勁草書房。
- Sen, A. (2002). Open and Closed Impartiality. *The Journal of Philosophy*, 99(9), 445-469. 岡敬之助訳(2008)『福祉と正義』(第5章) 東京大学出版会。
- Sen, A. (2010). Adam Smith and the contemporary world. *Erasmus Journal for Philosophy and Economics*, 3(1), 50-67.
- Smith, A. (1976a). *An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations*. Ed. R.H. Campbell & A.S. Skinner, OXFORD: CLARENDON PRESS. 大内兵衛・松川訳(1959)『諸国民の富』岩波書店。
- Smith, A. (1976b). *The theory of moral sentiments*. Ed. D.D. Raphael & A.L. Macfie, OXFORD: CLARENDON PRESS. 水田洋訳(2003)『道徳感情論』岩波書店。
- Tajima, K. (2007). The theory of institutions and collective action in Adam Smith's

Theory of Moral Sentiments. *The Journal of Socio-Economics*, 36(4), 578-594.

- Thaler, R. H., & Shefrin, H. M. (1981). An economic theory of self-control. *Journal of political Economy*, 89(2), 392-406.
- Thunder, D. (2016). Moral Parochialism and the Limits of Impartiality. *The Heythrop Journal*.
- Vanberg, V. J. (2008). On the economics of moral preferences. *American journal of Economics and Sociology*, 67(4), 605-628.
- Weibull, J. W. (1997). *Evolutionary game theory*. MIT press. 大和瀬監訳(1999)『進化ゲームの理論』オフィスカノウチ。
- White, M. D. (2006). Multiple utilities and weakness of will: A Kantian perspective. *Review of Social Economy*, 64(1), 1-20.

和文

- 有江大介(2014)「18世紀スコットランド学会/国際アダム・スミス学会合同大会(2013年7月3日-6日)に参加して」『経済学史研究』, 56(1), 117-121。
- 石沢芳次郎(1990)『経済学における神』財団法人産業経済研究協会。
- 大浦宏邦(2008)『社会科学者のための進化ゲーム理論: 基礎から応用まで』勁草書房。
- 後藤玲子(2002)『正義の経済哲学』東洋経済新報社。
- 坂本幹雄(2004)「アマルティア・センのスミス経済学」『通信教育部論集』, 7, 103-117。
- 坂本幹雄(2006)「鏡のメタファー—ヒュームとスミス—」『通信教育部論集』, 9, 16-31。
- 篠原久(1998)「スミス道徳論における『歓喜』と『悲哀』—『道徳感情の腐敗』をめぐって—」『経済学論究』, 52(1), 85-107。
- 篠原久(2009)「アダム・スミスにおける『体系』と『体系の人』」『経済学論究』, 63(3), 667-685。
- 柴田徳太郎(2010)「『見えざる手』と『コンヴェンション』—スミスとヒュームの秩序生成論」『経済学論集』, 75(4), 2-22。
- 鈴木信雄(1992)『アダム・スミスの知識=社会哲学』名古屋大学出版会。
- 鈴木興太郎・後藤玲子(2001)『アマルティア・セン—経済学と倫理学—』実教出版社。
- スミス・メイナード著/寺本英・梯正之訳(1985)『進化とゲームの理論』産業図書。
- セン・アマルティア著/池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳(1999)『不平等の再検討—潜在能力と自由—』岩波書店。
- セン・アマルティア著/徳永澄憲・青山治城・松本保美訳(2002)『経済学の再生』麗沢大学出版会。
- セン・アマルティア著/池本幸生訳(2011)『正義のアイデア』明石書店。
- セン・アマルティア著/若松良樹・須賀晃一・後藤玲子監訳(2014)『合理性と自由(上)』勁草書房。
- 高哲男(2017)『アダム・スミス競争と共感, そして自由な社会へ』講談社。

- 田島慶吾(2003)『アダム・スミスの制度主義経済学』ミネルヴァ書房。
- 田中正司(1993)『アダム・スミスの自然神学』御茶の水書房。
- 田中正司(2000)『アダム・スミスと現代』御茶の水書房。
- 田中正司(2017)『増補改訂版アダム・スミスの倫理学：『哲学論文集』・『道德感情論』・『国富論』』御茶の水書房。
- 堂目卓生(2008)『アダム・スミスー『道德感情論』と『国富論』の世界』中央公論新社。
- 中谷武雄(1996)『スミス経済学の国家と財政』ナカニシヤ出版。
- 中谷武雄(2013)「アダム・スミスと現代」『経済教育』, 32, 24-30。
- 新村聡(1994)『経済学の成立-アダム・スミスと近代自然法学-』御茶の水書房。
- 山口正春(1983)「アダム・スミスと理神論」『政経研究』, 19(3), 510-533。
- 山口正春(2010)『アダム・スミスの思想像』三恵社。
- 山口正春(2014)『アダム・スミスとその周辺 思想・経済・社会』三恵社。
- 山本勝也(2014)「アダム・スミスにおける公共性と自己利益の追求」『山口大学哲学研究』, 21, 41-61。
- 村越好男(1999)「アダム・スミス自然神学と経済生活の視座」『日本の神学』, 38, 34-59。
- モロウ・G.R.著／鈴木信雄・市岡義章訳(1992)『アダム・スミスにおける倫理と経済』未来社。
- ラファエル・D・D 著／久保芳和訳(1986)『アダム・スミスの哲学思考』雄松堂出版。
- ロールズ・ジョン著／川本隆史・福間聡・神島裕子訳(2010)『正義論』紀伊國屋書店。